

『那覇港図屏風』にみる19世紀那覇港の船

板井英伸※

Ⅰ はじめに ―問題の所在―

筆者はかつて「奄美・沖縄の船に関する議論の中には、しばしば全体の文脈とは関係なく都合の良い記述や描写だけを恣意的に選び出し、『昔は』や『伝統的には』などの抽象的な括り方で時系列を無視したり、単発的な記述を一般化して強弁したりするものが散見された」と指摘し、「こうした時系列に対する無責任な態度は、奄美・沖縄の船に限らず他地域も含むモノ資料研究全体の信頼性を損ないかねない」と述べたことがある（板井 2006c : p.56）。検証不能な議論は、議論として成立するはずがない。そのような考えから、まずは船にまつわる文書や図像資料等の古文獻を書誌学的にリスト化して『琉球王国評定所文書』全巻に登場する船舶・舟艇のインデックスを作成し（板井 2003b : pp.85-122）、15～16世紀のポルトガル語文献の和訳を試み（板井 2004b : pp.61-76）、奄美大島の一船頭の航海日記を現代語訳するなどして（板井 2006a : pp.43-56）、海事学・造船学等の技術的方法を援用した文献の読解例を示してきた。

本稿では、こうした作業に引き続き、図像資料の読解例を紹介したいと思う。特にここでは、那覇港を主たるモチーフとして近世末～明治期に描かれた一連の屏風絵をとりあげたい。以下、それらを一括して『那覇港図屏風』と呼ぶこととするが、小野まさ子、謝敷眞起子らの研究によれば（注1）、それらは屏風の形態を保持しているもの5点と、軸装に改められたと思われるもの1点の、計6点の現存が確認されている（注2）。「首里那覇港図屏風（沖縄県立博物館蔵）」、「琉球交易港図屏風（浦添市美術館蔵）」、「那覇港図屏風（首里城公園蔵）」、「琉球進貢船図屏風（京都大学総合博物館蔵）」、「琉球貿易図屏風（滋賀大学経済学部附属資料館蔵）」の5点が前者であり、「琉球交易港図（浦添市美術館蔵）」が後者である（図1～6）。これらはすべてほぼ同一の時期に作成されたものであり、そこには同時代の船舶・舟艇が多数、描かれている。そのため、近世末～明治期の那覇港という時間的・空間的限定があるとはいえ、各船の技術的特徴について多くの事例を一度に得られる資料として貴重であり、少なくともその時点・地点における海事史学的状況を再構成する上で欠かすことができない史料である。他の図像資料に先んじてとりあげるゆえんである（注3）。

以下、本稿では、これらに描かれた船を1隻ごとに分析し、各船の技術的特徴を明らかにして、近世末～明治期初頭的那覇港で使われていた船舶・舟艇がどのようなものだったのかについて取りまとめた。具体的には、それぞれの資料から船体の全体像がわかるすべての船舶・舟艇をピックアップし、それらの船型、数、状態、所在、搭乗人員数、帆装・推進具の状態、

※日本海事史学会・沖縄民俗学会会員

その他という7項目に注目し、資料ごとに一覧表に整理するとともに(表1～6)、各資料の全体的な特徴について略述する。次に、その一覧表を船型ごとに整理しなおし(表7～15)、各船型について、それぞれの技術的特徴を明らかにしたい。

なお、その際、各船の船型を同定する基礎資料として、東京国立博物館所蔵の『琉球船舶図』5枚を参照した(図7～14)。ただし、冊封船や爬龍船、弁才船など『琉球船舶図』にない船型については、これまで筆者が用いてきた用語を使うこととした。また、本文中、基本的に唐船と同様のジャンク型の船体である冊封船を除き、こうした船舶・舟艇についての分析は割愛した。さらに、帆走中の帆装の状態をあらわす際、船体中央の主帆が左舷・右舷のどちらに片寄っているかによって「左開き」「右開き」と表現し、前方の弥帆が主帆と逆方向に片寄せられて開かれる場合は「観音開き」と呼ぶことにした(図15)。同様に、図中に描かれた地名や施設名の表記は基本的に該当する『那覇港図屏風』の付箋あるいは書き込みによることとするが、それらがいない場合は嘉手納宗徳作図による「那覇読史地図」と(図16)、那覇市内での聞き取り調査で得た民俗語彙によることとする(注4)。

II 『那覇港図屏風』の船一覧表

1. 「首里那覇港図屏風(沖縄県立博物館蔵)」の船(図1・表1)

ここでは首里城とそこへ通じる街道が描かれた第1・2扇を省略しているが、白・青・赤の縦三色旗を掲げたフランスあるいはロシアの艦船2隻、中国への朝貢を終えて帰国した唐船、爬龍船競漕の様子が描かれていることから、首里の琉球王府がまだ存在・機能しており、仏・露船の来航した1850年ごろの旧暦五月四日の様子が描かれていると思われる。『琉球船舶図』にあるすべての船型の船が登場するが、慶良間船が描かれている数少ない作品のひとつである。薩摩藩の幟1流のみが逆方向にたなびいているが、それ以外、すべての帆や旗・幟類の方向は一致しており、初夏の南西季節風が吹いているように描かれており、画面向かって左奥から右手前に吹いている。実態が不明な準構造船が数隻描かれているが、丸木舟の舷側の手すり板や補強用横木、馬艦船伝馬の船尾の形状や棚板の継ぎ目、唐船のラダーの構造、主帆を右舷・左舷側それぞれに片寄せて観音開きにしている船の様子など、一連の船の描写の細かさと正確さを考えると、作者の空想のみによるものとは思われない。更なる検討が必要である。

2. 「琉球交易港図屏風(浦添市美術館蔵)」の船(図2・表2)

中国への朝貢を終えて帰国した唐船、爬龍船競漕の様子が描かれていることから、これも近世末の旧暦五月四日の様子が描かれていることがわかる。入港中の船が大砲を発射している模様が描かれている点は、当時の港湾行政の制度を考える上で興味深い。『琉球船舶図』にあるすべての船型の船が登場する。装飾的な風景の描写が印象に残る。帆装・艀装のロープ類の取り回しや船体の描き方などが詳細に描きこまれており、実際の風景を見た経験のある作者の手に

なるものと思われる。反面、各船間の大きさの比率は著しくバランスを欠いており、たとえば
筵帆あるいは網代帆と思われる帆の描写は細かいが、写実であったか否かについては疑問が残
る。操業中のクリ船が描かれているめずらしい作品のひとつであり、国場川河口の汽水域での
漁撈の様子を知る上で、興味深い。風向と帆装、旗・幟類との関係は、ここでもほぼ正確に描
かれている。

3. 「那覇港図屏風（首里城公園所蔵）」の船（図3・表3）

最も絵画的な作品。船に関しては、ロープ類の取り回し、装飾など、実に細かなところまで
描きこまれている。しかし、どの船も全体に寸詰まりに描かれており、舷側の反り返り（シア）
が強調されるなどのデフォルメが目立つ。帆走中の船は第5・6扇にまたがって描かれた馬艦
船1隻のみであるが、主帆を左舷側に片寄せた観音開きになっており、左から右へ吹く風向と
の間に矛盾はない。他の旗・幟類についても同様のことが言えるが、疾走する爬龍船だけは逆
方向になびいている。スピード感、躍動感の表現と思われる。第1・2扇奥には爬龍船競漕と
ともにおこなわれた通称ユッカヌヒーの行事である玩具売りの様子が描かれており、風俗画と
して興味深い。

4. 「琉球進貢船図屏風（京都大学総合博物館蔵）」の船（図4・表4）

中国への朝貢を終えて帰国した唐船、爬龍船競漕の様子が描かれていることから、これも近
世末の旧暦五月四日の様子が描かれていることがわかる。『琉球船舶図』にあるすべての船型の
船が登場するが、慶良間船は描かれていない。装飾的な風景の描写が印象に残る。浦添市美術
館蔵の屏風とよく似通っており、同一の工房の作と思われる。第3扇奥の唐船あるいは楫船に
主帆が2枚重なって描かれている点に矛盾があるが、帆装・幟装のロープ類の取り回しや船体
の描き方など、船に関しては詳細に描きこまれている。実際の風景を見た経験のある作者の手
になるものと思われる。ただし、第6扇奥の水源で取水中の船がクリ船になっており、しかも
船頭が棹を構えている点には疑問が残る。ここでも入港中の船が大砲を発射している。風向と
帆装、旗・幟類との関係は、ここでもほぼ正確に描かれている。

5. 「琉球貿易図屏風（滋賀大学経済学部附属資料館蔵）」の船（図5・表5）

中国への朝貢を終えて帰国した唐船、爬龍船競漕の様子が描かれていることから、これも近
世末の旧暦五月四日の様子が描かれていることがわかる。『琉球船舶図』にあるすべての船型の
船が登場するが、慶良間船は描かれていない。装飾的な風景の描写が印象に残る。浦添市美術
館、京都大学蔵の屏風とよく似通っており、同一の工房の作と思われる。第3扇の馬艦船が2
隻重なって描かれている点がおかしいが、帆装・幟装のロープ類の取り回しや船体の描き方な
ど、船に関しては詳細に描きこまれている。これも実際の風景を見た経験のある作者の手にな
るものと思われる。ただし、これも第6扇奥の水源で取水中の船がクリ船になっており、しか

も船頭が棹を構えている。やはり不審である。ここでも入港中の船が大砲を発射している。風向と帆装、旗・幟類との関係は、ここでもほぼ正確に描かれている。

6. 『琉球交易港図（浦添市美術館蔵）』の船（図6・表6）

現在は3幅対で軸装されているが、先出の小野、謝敷の研究では、もともとは屏風仕立てだったのではないかと推測されている。中国への朝貢を終えて帰国した唐船、爬龍船競漕の様子が描かれていることから、これも近世末の旧暦五月四日の様子が描かれていることがわかる。『琉球船舶図』にあるすべての船型の船が登場するが、慶良間船については、それかと推測される船が1隻、右幅に描かれているものの、不明である。右幅に琉球国王を封じる冊封船2隻が描かれている点で他の作品とはまったく異なる構成となっている。帆装・艀装のロープ類の取り回しや船体の描き方など、船に関しては詳細に描きこまれている。これも実際の風景を見た経験のある作者の手になるものと思われる。風景の描写はこれも装飾的だが、雰囲気は浦添市美術館や京都大学、滋賀大学蔵の屏風とは異なっており、また別の作者ないし工房の作と思われる。ここでも入港中の船が大砲を発射している。風向と旗・幟類との関係はここでもほぼ正確に描かれているが、左から右へ吹く風に対し、右幅手前の冊封船は逆風に対応する帆装になっている。あるいは入港後に帆走をやめて回頭し、スピードを落として縮帆する直前の模様を描いているかと思われる。

III 『那覇港図屏風』の船

1. 唐船・冊封船（図7，表7・16）

どちらも中国華南地方で建造されていたジャンク型の船のバリエーションである。特に福建省で使われたものは「福船」と呼ばれていた。帆装が観音開きになっているところを正面から見るとちょうど鳥が羽を広げているような印象を与えることから、「鳥船」、「鳥船」とも呼ばれていた。沖縄にもこうした造船技術が伝えられており、現地で建造されていたが、福建省で造られるものとどのような違いがあったかについては、よくわかっていない。全幅の割に全長が長く、直進性、高速性に優れていたという話を聞いたことがあるが、詳しいことは不明である。船内が隔壁によって仕切られ、その隔壁自体が構造材の役割を果たし、極めて堅牢に造られている。

なお、『琉球船舶図』につけられた付箋によれば、艀と艀檣に「関帝王旗」と「黄色旗」、「ムカデ旗」、「三角旗」が、主檣に「三角旗」と「七星旗」、「ムカデ旗」と「進貢旗」が、前檣と舳に「三角旗」と「五色旗」、「舳旗」がそれぞれ掲げられることになっているが、絵の中では、それらに加えて王家である尚氏の紋章（巴紋）を白く染め抜いた日本式の幟が加えられている。これは和船である弁才船や鹿児島港路の楷船のように主に薩摩と関係する諸船に見られるものであり、『那覇港図屏風』でもそのように描かれているが、中国に対して薩摩との関係を極力隠

そうとした当時の琉球国が、あえて掲げたとは思にくい。『琉球船舶図』は王府による船舶管理が過去の話になってから以後、明治期になってから描かれたものであり、唐船との混同が起きた可能性を考えるべきであろう。

また、帆装についてだが、『琉球船舶図』が布帆を使っているのに対し、『那覇港図屏風』の場合、どの資料でも筵帆ないし網代帆を使っているように見える。筆者がこれまでおこなってきた調査によれば、筵帆の材料はカヤ・ガヤと呼ばれるススキ類かビーグと呼ばれるイグサの類であった。ただし、イグサは栽培植物であり、高価であったためか、普及するのは大正期に入ってからのことだったそうである。稲や麦の藁を使った筵帆については聞いたことがないが、ススキを使った帆は重く、隙間も多いために性能が悪かったそうである。左開き、右開き、観音開きなど、多様な帆装がされているが、針路と風向との関係に合わせて変更可能なジャンクの帆の特徴がよくわかる。

2. 楷船（図8，表8・16）

これも唐船や冊封船と同様、ジャンク型の船である。『琉球船舶図』につけられた付箋を見ると、唐船と楷船のスペックはまったく同一だが、新造されて数回那覇～福州間に就航した唐船は、そののち、那覇～鹿児島航路にドロップして楷船と呼ばれるようになったということで、実際にはまったく同じ船である。東京国立博物館所蔵の「西国巡幸」と題された一連の写真の中に明治初年の鹿児島港を撮影したものが残っているが、その中に、一枚だけこの楷船が写っているものがある（写真1）。舷側の反り返りの強い特異なシルエットや、複数の材を束ねてタガで固定するマストの構造などがよくわかる。

なお、『琉球船舶図』の付箋によれば楷船には「御紋旗」が掲げられることになっており、実際に巴紋を白く染め抜いた日本式の幟が加えられている。これは先述のとおり『那覇港図屏風』でも見られるものだが、薩摩に対しては琉球国も日本の方式に従っていることを示すねらいがあったのだろうか。また、艫には「関帝王旗」のかわりに「菩薩旗」が掲げられることになっているが、当の『琉球船舶図』では「日輪旗」が描かれているだけである。こうした異動がどのような理由にもとづくものなのか、詳細は不明である。

3. 馬艦船（図9，表9・16）

馬艦はマーランと読むが、この読み方からも想像されるとおり、これも中国のジャンク型に類する船型を持った船である。なお、1950年代の前半まで、この船と同じように馬艦船と呼ばれる船が沖縄本島東海岸で使われていたが（板井 2002b：pp.1-17）、明治期と昭和期それぞれの写真を比較してみると、舷側の反り返りや船首の形状、舷側・船底の塗色が大きく変化していることがわかる（写真2・3）。塗色はともかく、船型そのものに大きな変化があったことが理解できる。たとえば船内の隔壁が極端に少なくなり、喫水線より下部の船首の形状が大きく異なっているが、このような構造は他のジャンク型の船には見られない。単純にジャンク型と

は言い切れず、造船技術が現地化する過程で変化が起きたと考えられる（板井 2002b：pp.1－17）。

なお、このような変化を経た後の馬艦船の建造経験がある人物が中心となり、近世期の唐船や楷船、馬艦船を「復元」しようと試みたことがあるようだが、塗色以外、ここでとりあげた写真や図像資料にある船体に似ているとは思えない（写真4）。2007年現在、この形状を持つ船体は実船・模型を問わずこれ以外に造られていないが、今後、これに倣って製作・建造されるようになれば新たな船型が誕生することになり、極端に言えば明治期以後に現地化した民俗技術に新たな「伝統の創出」が起きる可能性さえ考えられよう。今後の注意が必要である。

4. 慶良間船（図10、表10・16）

この船については、実態がほとんど不明である。あの膨大な『琉球王国評定所文書』を見ても、「朝鮮人拾老人慶良間漂着馬艦船を以送越候日記（第1巻・文書番号320）」にわずか2例、「去月廿九日、慶良間島江朝鮮人漂着致破船候二付、順風次第、慶良間船を以御当地江送越筈之由・・・」「尤、乗船之儀、干瀬ニ走揚、水船ニ相成候間、慶良間船を以追々此方江差渡筈之由・・・」という記述が見られるだけである。この場合、船型としての慶良間船を言っているのか、あるいは単に船籍が慶良間諸島にあることを言っているのかはわからない。

また、徐葆光による1721年の『中山傳信録』を見ると、「其各島往来通載之船、大小皆尖底、底板鱗次、太平山船加飾欄檻為異」という記述があり、「欄檻」に「飾」を「加」えた「太平山船」という船の図が添えられている（図17）。「太平山」とは当時の中国における用語で、宮古島をさす語だが、『琉球船舶図』や『那覇港図屏風』の慶良間船には船べりからひらひらした簾のようなものが下がっており、実用的な機能は持たない装飾であるように見える。「太平山船」の「欄檻」の装飾とまったく違っていることがネックになるものの、これを先の「加飾欄檻」と考えれば、あるいは何らかの関係が想定できるかもしれない。ともあれ、これがなぜ慶良間船と呼ばれるのかという理由さえ、不明なのである。

なお、『琉球船舶図』の付箋によれば、慶良間船の諸元は「長四丈三尺高サ八尺鱸高老丈三尺面高老丈老尺」、「本橋長四丈三尺廻三尺 帆長三丈式尺幅式丈老尺 帆ケタ長式丈三尺廻老尺三寸」、「弥帆橋長三丈式尺廻式尺 帆長老丈八尺五寸幅老丈五尺 帆ケタ長老丈六尺廻老尺」、「櫓長老丈七尺ヒ六寸」、「楫長八尺幅式尺老寸」ということになっており、上出の馬艦船よりやや小型ながら、ほぼそれに匹敵する船体規模を備えている。競合することはなかったのだろうか。考える棲み分け方法としては、塗装を施さない簡素な外見から想像されるように、建造時のコストが低く、手軽に建造できたことがあったのかもしれない。

ともあれ、名称の問題ひとつをとっても不明なことが多く、更なる調査が必要である。ちなみに、筆者が当の慶良間諸島（波嘉敷島、座間味島、阿嘉島、慶留間島）でおこなった調査でも、詳細は不明であった。

5. 唐船伝馬・石伝馬（図11・12、表11・16）

『琉球船舶図』で見る限り両者の船型はまったく異なっているが、すべての『那覇港図屏風』で不分明に描かれている。伝馬という名称から推測されるとおり、どちらも港内に代表される比較的近距离の穏やかな水面で人貨の輸送に従事した船であることは間違いなからうが、『琉球船舶図』の石伝馬はマストを2本備えており、あるいは沖縄本島とその周辺島嶼、八重山群島など、もう少し距離の長い航路で使用された可能性がある。事実、『琉球船舶図』の石伝馬に似た船は2007年現在も八重山群島の黒島でおこなわれる豊年祭の爬龍船競漕や沖縄本島北部の塩屋湾でおこなわれるウンジャミという祭りに登場しており（写真5・6）、かつては渡船・運搬船として使われたという話が残っている（板井 2006c：pp.55-70）。また、那覇市内では落平（ウティンダ）と呼ばれる水源から清水を汲み、那覇港内の船舶や市街地に水を供給した水売船（ミジウイブニ）の写真が残っている（写真7）。少なくとも石伝馬に関しては、近世以後も沖縄で使われたことは間違いなからう。

しかし、唐船伝馬についてはまったく不明である。類似する船は松浦史料博物館所蔵の『外国船具図巻』に「暹羅サンパン」として描かれているが（図18）、これは近世期の長崎に入港したシャム（現在のタイ）の貿易船に附属するものであり、おそらくは先出の唐船すなわちジャンク型の船舶に附属する舟艇を指すものと思われる。しかし、明治期以後、『琉球船舶図』にあるような船は写真も残っておらず、その後、早い段階で消滅したものと思われる。また、『那覇港図屏風』にも明らかにこれとわかる船は登場しておらず、たとえば船尾の両舷が燕尾状に後ろに突き出るなど、華南・台湾で使われている、いわゆるサンパンに似た形状に描かれることが多い（写真8）。近世期に使われていたとしても、それほど数は多くなかったのではないだろうか。

6. 馬艦船伝馬（図13、表12・16）

これも伝馬という名称から推測されるとおり、比較的近距离の穏やかな水面で人貨の輸送に従事した船だろう。これも先出の石伝馬や唐船伝馬と同様、『那覇港図屏風』に描かれている形状と『琉球船舶図』における形状との間に開きがあり、『那覇港図屏風』には特にこれを描いたと思われる舟艇は見えない。『琉球船舶図』で見る限り和船と思われるのだが、なにゆえわざわざ馬艦船という名前を冠したのか、また、実際に馬艦船に附属したものかどうかについてはよくわからない。すべてが名称どおり馬艦船に附属したわけではなく、薩摩から来航した弁才船に附属するものや単独で使われるものなども入り混じって描かれていると思われる。ともあれ、近世期を通し薩摩藩を経由していわゆる日本本土の文化的影響も受容してきた琉球国で、和船が使われたとしても不思議ではないだろう。

7. クリ船（図14、表13・16）

『琉球船舶図』はもとよりすべての『那覇港図屏風』でも、ただ単に舷側板の上辺（船べり）

を保護するための薄い板材が取り付けられているだけである。複数の舷側板をつなぎ合わせて造られているようには描かれていない。一本の丸太から削り出して作られた丸木舟であることは明らかである。船首・船尾の正面がどちらも逆三角形の平面に加工され、船体中央よりも舳に近いところに帆柱が立っている。また、『琉球船舶図』ではその内側に丸太を削り残してロープ類を取り付ける突起を備えていることがわかる。こうした形状や加工上の特徴はサバニと呼ばれる準構造船にも共通しているが、ここに描かれているのは明治期になってから複材化したサバニの、それ以前の原型ともいえるべき船である。『那覇港図屏風』では大半の船に2人しか乗っていないことから、船体が極めて小さいことがうかがえるのだが、『琉球船舶図』の付箋では、全長は8メートル弱、全幅は90センチメートルを超えている。丸木舟としては比較的、大きいのだが、こうした大型の丸木舟を作るだけの材木は、沖縄のような小島嶼からなる地域では難しかったろう。サバニは明治期以後、漁法の大規模化に伴って船体が大型化し、それを契機として複材化して準構造船となるのだが（板井 2005a：pp.27-44）、それ以前から、すでに大型化が始まっていたことも考えられる。

IV おわりに

筆者はこれまで奄美・沖縄群島の船を例として、まずは海事学・造船学等の技術的方法を援用した観察・聞き取り・文献および図像資料の読解によりながら、各時代における各船の構造・性能・運用（使用）方法といった技術的特徴とそれら相互の関係性を明らかにし、ついで、その技術史の変遷を、その船を取り巻く自然・社会・文化という三つの環境的要因が変化する動態と関連付けながら、それ自体、通時的動態として論じる試みを続けてきた。ひらたくいえば、合目的構造物であるさまざまな船が、いつ・どのような自然の中、どのような社会的・文化的背景のもとでどのような運用（使用）方法を持ち、それに合わせてどのような構造・性能を持つようになったのか、そして、そのような環境的要因がいつ・どのように変化し、その結果としてその技術的特徴がどのように変化し、あるいは他のモノに代替され、消滅したのか、そしてその中の何が・いつ・どこに・どのように継承されたのか、そしてそれはなぜだったのか、を明らかにしようと試みてきたわけである（板井 2001：pp.11-34, 2002a：pp.73-90, 2002b：pp.1-17, 2003a：pp.1-14, 2004a：pp.1-6, 2005a：pp.27-44, 2005b：pp.556-581, 2007：pp.1-16）。

そして、筆者はこのような議論の枠組みを「四次元モデル」と名づけ、体系化を試みるとともに事例報告を積み上げてきたわけだが、その中で、船はそのような環境的要因とその変化の動態を見るための「窓」として活用可能であるように思われ、ひるがえって、副次的・間接的にせよそれらの船を使う集団ないし地域をとりまく自然・社会・文化的環境の、各時代における状況と変遷を明らかにすることができるように思われた（板井 2006c：pp.55-70）。換言すれば、船の技術史の変遷を動態論的に記述することは、すなわち自然・社会・文化の変容を記述することに通じているのであり、そのことは船に限らず、民具あるいは物質文化と総称される

モノ資料全般にも言えるように思う。従来、単に分布論、系統論に終始するものとされ、少なくとも筆者の近くでは軽視されがちであったモノ資料に関する技術史的研究も、民俗学・文化人類学的研究における視座のひとつとして、じゅうぶん、成立するように思われたのである。技術もまた文化であることを考えると、このような認識は言わずもがなのことであるように思われるのだが、時として、民俗学・文化人類学的研究方法としては別扱いされることもあったように思われる。

たとえば、筆者が取り組んでいる奄美・沖縄群島の船の場合、柴田恵司や白石勝彦らによる技術的研究をはじめ、上江洲均、川崎晃稔、北見俊夫、下野敏見、比嘉政夫、金城衛、重江良彦、登山修、野口武徳、基俊太郎、山岡英世らによる民俗誌的な事例報告があり、池野茂、池宮正治、上田不二夫、小野まさ子、喜舎場一隆、金城功、高良倉吉、豊見山和行、山形欣也、山下文武らによる歴史学的研究などの蓄積があるのだが（注5）、ここで挙げた三つの方法による研究が、それぞれ個別に積み上げられてきたように見える。むろん、問題意識と方法論は論者ごとに多様であるべきであり、各自がそれらに厳密であることは決して責められることなく、当然のことではあるのだが、諸学問相互間の協働は排除されるべきではない。船の場合はもちろん他の多くのモノ資料の場合でも、このような考え方にもとづく研究は、少なくとも筆者の周囲では現在も隆盛とはいいいがたいが、卑近ながら、もったいない、と思う次第である。

たとえば、特に社会研究あるいは文化研究の領域で「琉球」、「南島」、「オキナワ」などと称して一括され、トカラ列島以北の「日本」、「本土」あるいは「ヤマト」と対置されがちなこれらの島々が、単なる地理的概念以上の「文化圏」や「文化領域」ないし「地域」としてまとめられるのかという問題がある。筆者がこだわってきた船の事例でも、各船の分布状況は、奄美、沖縄、宮古、八重山など群島単位の比較的広い範囲だけでなく、沖縄本島のような同一の島内部でさえ偏っていた。このことは、その船を用いてきた各地の自然・社会・文化的環境とその歴史の多様性を如実に示している（板井 2006c：pp.55～70）。筆者はこのような問題意識を比嘉政夫と津波高志の指摘から得たのだが（比嘉 1996：pp.437～448、津波 1996：pp.449～462）、各島の、あるいは同じ島の中であっても集落や集団ごとに多様な社会や文化のあり方に関するそのような問題意識は、これまでの民俗学・文化人類学的研究成果を享けてなお、現在も、そして将来的にも意義を有し続けると思う。さまざまな「窓」を通したこれら地域の社会や文化の多様性と統一性に関する議論は、これからも蓄積されるべきであり、その拠って立つところの前史を知ることにも有意義であって、船の場合もまた、その史的展開について考えることも必要になるように思うのである。

ただし、細かいことを言うようだが、その前史すなわち各船間の系統関係や伝播時期・経路など歴史性を帯びた個別のトピックを取り上げる際、そのトピックが何であれ、それらが依拠する文書・図像などのいわゆる史料については、当然、慎重の上にも慎重を期したテキストクリティークが必要である。モノ資料研究は単に過去の事象を再構成するだけのものではなく、現在から未来を見据えた議論も可能だと筆者は考えている。しかし、過去を再構成し、記録・

保存する意義が否定されてよいものではない。である以上、冒頭にも述べたことだが、「しばしば全体の文脈とは関係なく都合の良い記述や描写だけを恣意的に選び出し、『昔は』や『伝統的には』などの抽象的な括り方で時系列を無視したり、単発的な記述を一般化して強弁したりする」ような、「時系列に対する無責任な態度」は厳に慎まねばなるまい。繰り返すが、のちの検証が不可能な議論は議論として成立するはずがないのである。自戒したい。

注

(1) 残念ながらその成果はいまだ公刊されていないが、小野、謝敷は『那覇港図屏風』についての研究会を催して、それらを「読む」作業を積み上げている。

(2) これらの資料はすべて実見したが、直接、現地に出向かなくとも、今は軸装されている浦添市美術館の「琉球交易港図」を除き、九州国立博物館が2006年に催した特別展『うるま ちゅら島 琉球』の図録に美しい印刷がある。また、浦添市美術館の「琉球交易港図」は、同館の紀要第7号にカラーで掲載されている。今回の作業は主にこれらによっておこなった。

(3) 沖縄県立博物館や同県立図書館東恩納文庫、沖縄県立芸術大学図書館・資料館や西尾市立図書館岩瀬文庫などにも、同時期の同モチーフによる他の図像資料もあるが、絵画的演出が相対的に多いためにデフォルメが目立つことや、写真しか残っていないために詳細が不明であることなどから、今回はとりあげなかった。

(4) 嘉手納宗徳の「那覇読史地図」は1968年に沖縄風土記刊行会によってはじめて世に出され、以後、さまざまな書物に掲載されてきたが、今回は、2005年に内閣府沖縄総合事務局那覇港湾・空港整備事務所が発行したパンフレット、『やさしく読める那覇港の歴史』の28ページに掲げられたものを参照した。同地図が掲載され、比較的、入手しやすいのは、1983年に柏書房から発行された『沖縄歴史地図 歴史編』だろう。なお、余談ながら、『やさしく読める・・・』は若年者むけにわかりやすく編集されたものであるが、収録されている史料は、これ以外にも貴重なものが多い。非売品であることが惜しまれる。

(5) これらの論者は他にも数多くの文章を発表しており、参考までに、以下、ここでは中でも特に筆者が繰り返し参照しているものを挙げておきたい。奄美・沖縄群島の船について考えるとき、ここに挙げた文献は最低でも読んでおきたいものばかりである。

池野茂

1994年 『琉球山原船水運の展開』 ロマン書房。

池宮正治

1991年 「『おもろさうし』における航海と海の民俗」『古代の日本 3』 555～575頁、角川書店。

上江洲均

1973年 『沖縄の民具』 慶友社。

1982年 『沖縄の暮らしと民具』 慶友社。

上田不二夫

1991年 「漁具」『糸満市史資料編12 民俗資料』 糸満市役所。

小野まさ子

1994年 「近世琉球の道の島と琉球 ―評定所文書の事例を通して―」『南西諸島における文化複合の総合的研究』 8～10頁 沖縄県立芸術大学。

川崎晃稔

1991年 『日本丸木舟の研究』 法政大学出版局。

喜舎場一隆

1970年 「薩琉関係の沿革と所収資料」『那覇市史資料篇第一巻2』 那覇市。

1974年 「馬艦船考」『海事史研究』23号 日本海事史学会。

1995年 『近世薩琉関係史の研究』 国書刊行会。

北見俊夫

1973年 「南島の海上交通民俗 造船儀礼を中心に」『歴史人類』5号 3～26頁、筑波大学歴史人類学系。

金城功

1983年 『近代沖縄の鉄道の海運』 ひるぎ社。

金城衛

1991年 「漁業」『糸満市史資料編12 民俗資料』 糸満市役所。

柴田恵司

1998年 『東アジアと東南アジアの船』 長崎県労働金庫。

1991年 『北西太平洋地域における在来型沿岸漁船漁具』 東南アジア漁船研究会。

下野敏見

1989年 『ヤマト琉球民俗の比較研究』 法政大学出版局。

白石勝彦

1985年 『サバニ』 白石勝彦住空間設計室。

重江良彦

1981年 「交通・運搬」『図説 郷土のくらしと文化 下巻』 212～217頁、新星図書出版。

高良倉吉

1985年 「海運の発展と商活動」『那覇市史通史篇1』 那覇市。

出口晶子

2001年 『丸木舟』 法政大学出版局。

豊見山和行

2002年 「海船と久米村」『北の平泉、南の琉球』 200～219頁、中央公論社。

登山修

1978年 『蘇刈民俗誌』 瀬戸内町教育委員会。

名嘉真宜勝

1983年 「山原船」『沖縄大百科事典 下巻』 765頁、沖縄タイムス社。

野口武徳

1975年 「沖縄の伝統的船について」『船』 119～139頁、社会思想社。

比嘉政夫

1973年 「シヌグ・ウンジャミと船漕ぎ儀礼」『沖縄県史 第23巻 民俗2』 沖縄県。

基俊太郎

1994年 『島を見直す』 南海日々新聞社。

山岡英世

1981年 「労働（海）」『図説 郷土のくらしと文化 下巻』 202～211頁、新星図書出版。

1988年 「海の道」『龍郷町誌 民俗編』 95～116頁、龍郷町。

山形欣也

2001年 「『南島風土記』における『尋定』について」『史料編集室紀要』26号 33～48頁 沖縄県教育委員会。

山下文武

1988年 『嘉永六年の奄美 解説「島中御取扱御一冊」』 ひるぎ社。

1995年 「『御国許直乗飛船萬日記』について」『南日本文化』 鹿児島女子短期大学。

参考文献

板井英伸

2001年 「奄美大島の船 丸木舟と準構造船」『沖縄民俗研究』20号 11～34頁、沖縄民俗学会。

2002年a 「奄美大島の船 モーター船」『沖縄民俗研究』21号 73～90頁、沖縄民俗学会。

2002年b 「馬艦船の多様化とその背景」『民具マンスリー』35巻5号 1～17頁、日本常民文化研究所。

2003年a 「沖縄県本部半島の準構造船・タタナー」『民具マンスリー』36巻2号 1～14頁、日本常民文化研究所

2003年b 「古文献の中の船 奄美・沖縄群島の船についての書誌学」『沖縄民俗研究』22号 85～122頁、沖縄民俗学会。

2004年a 「琉球大学資料館『風樹館』新収蔵のサバニの帆について」『民具マンスリー』36巻11号 1～6頁、日本常民文化研究所。

2004年b 「沖縄県・史料編集室所蔵のポルトガル語文献」『琉大アジア研究』5号 61～76頁、琉球大学法文学部附属アジア研究施設。

2005年a 「沖縄の準構造船・サバニ その登場から代替・消滅・継承まで」『民具研究』131

号 27～44頁、日本民具学会。

2005年b 「奄美大島の船の代替・消滅・継承 住用村山間集落の事例から」『文化人類学』69巻4号 556～581頁、日本文化人類学会。

2006年a 「奄美大島の船 ある航海記録に見る一九世紀の海事学的状況」『沖縄民俗研究』24号 沖縄民俗学会。

2006年b 「民俗技術とその地域の自然・文化・社会的環境との関係性についての動態的研究—沖縄本島の準構造船・サバニの事例から—」『環境科学総合研究所年報』24号 財団法人環境科学総合研究所。

2006年c 「奄美・沖縄群島の船—自然・社会・文化の動態を見る「窓」としてのモノ研究—」『民具研究』134号 55～70頁、日本民具学会。

2007年 「沖縄県八重山群島・黒島の船—豊年祭の爬龍船—」『民具マンスリー』39巻12号1～16頁、日本常民文化研究所。

比嘉政夫

1996年 「琉球列島文化研究の新視角」『民族学研究』61巻3号 437～448頁 日本民族学会。

津波高志

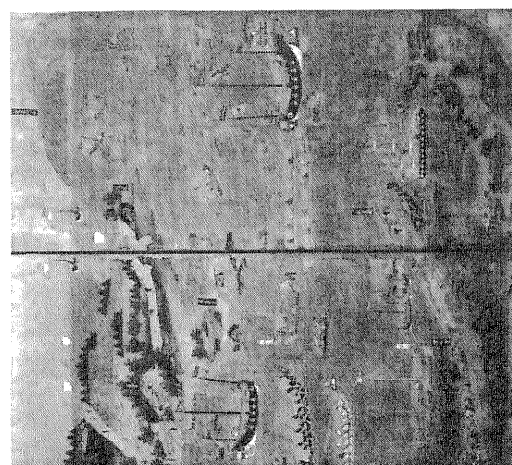
1996年 「対ヤマトの文化人類学」『民族学研究』61巻3号 449～462頁 日本民族学会。

图 1.「首里那覇港図屏風（沖縄県立博物館蔵・右から第3～8扇）」



第3扇

第4扇



第5扇

第6扇



第7扇

第8扇

图2.「琉球貿易図屏風（滋賀大学経済学部蔵・右から第1～6扇）」

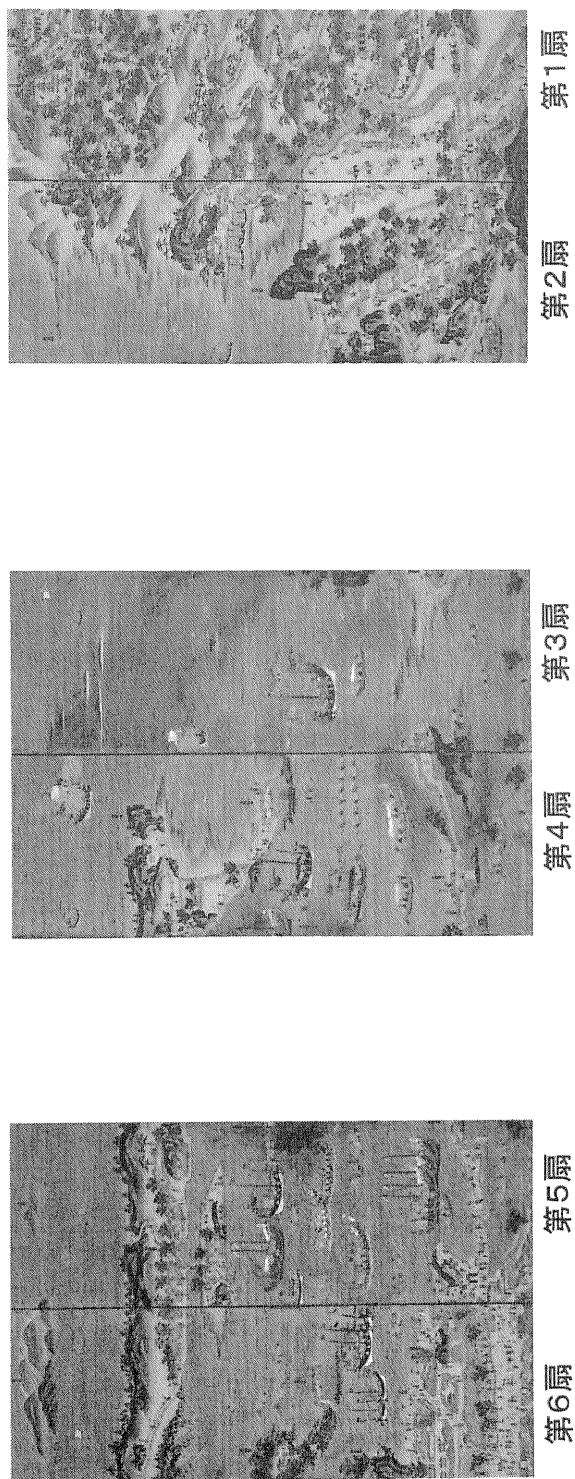
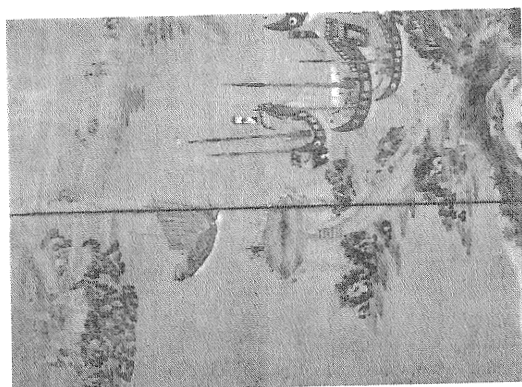


图 3. 「那霸港図屏風（首里城公園蔵・右から第 1 ～ 6 扇）」



第 2 扇 第 1 扇

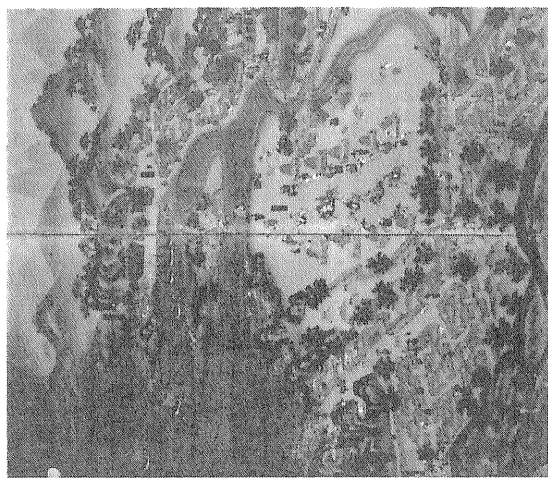


第 4 扇 第 3 扇



第 6 扇 第 5 扇

图 4.「琉球進貢船図屏風（京都大学総合博物館蔵・右から第1～6扇）」



第2扇 第1扇



第4扇 第3扇



第6扇 第5扇

图5.「琉球交易港図屏風（浦添市立美術館蔵・右から第1～6扇）」

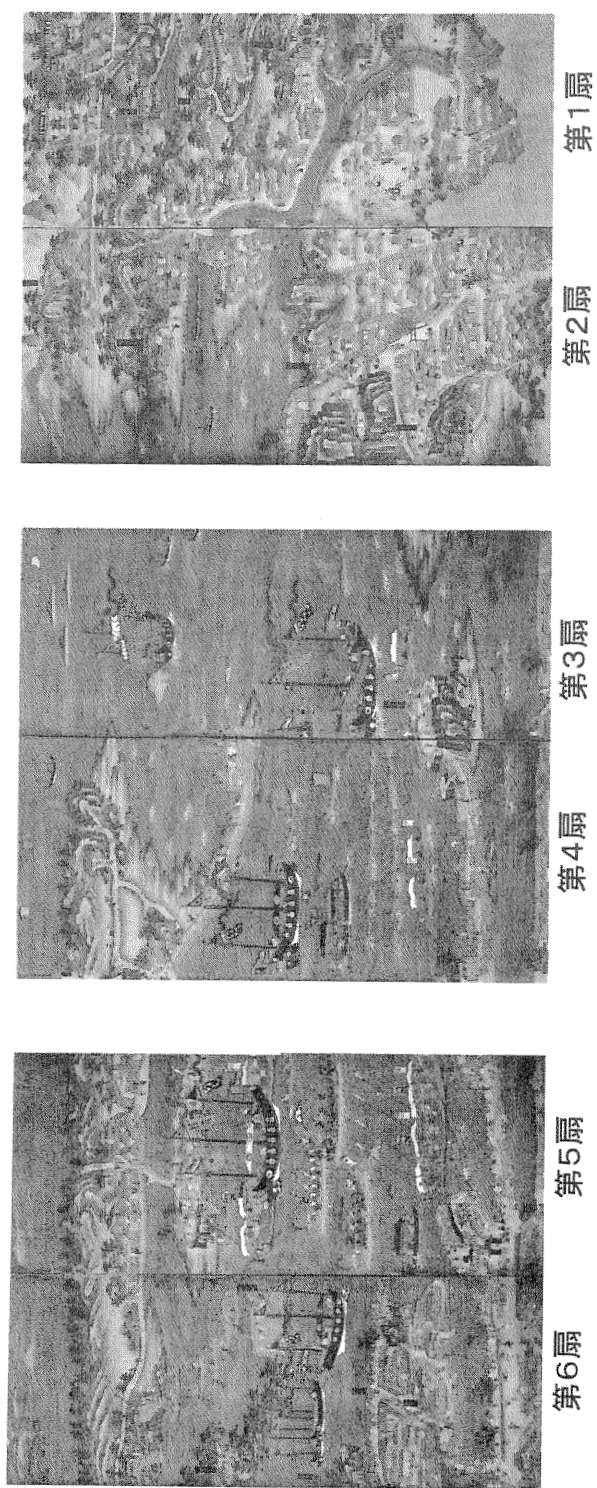
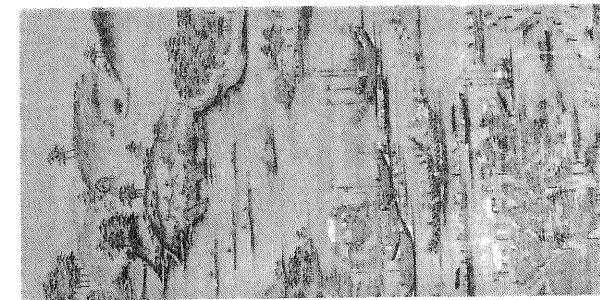


图6.「琉球交易港図掛軸（浦添市立美術館蔵・右から右幅、中幅、左幅）」



左幅



中幅



右幅

図7～14『琉球船舶図』

『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇 (2003年、中央公論美術出版)』より

図7 唐船図

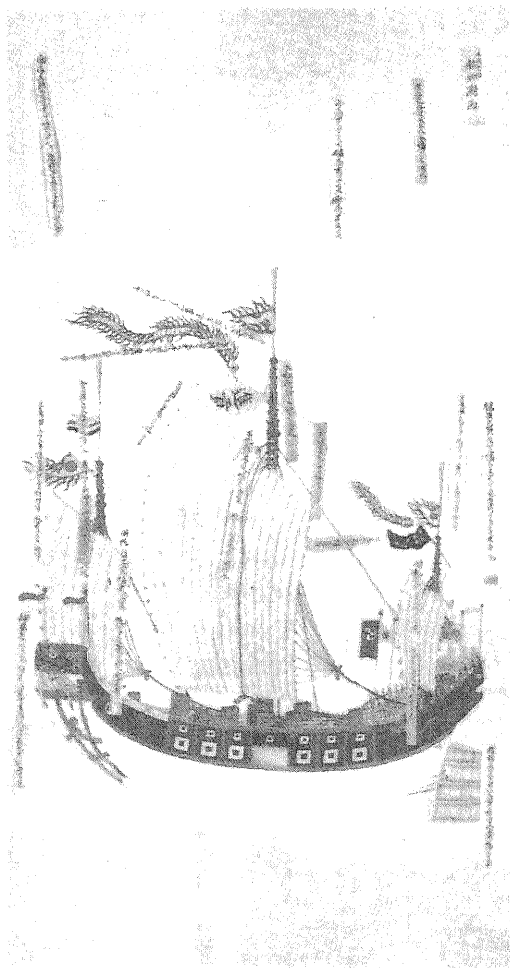


図8 楫船図

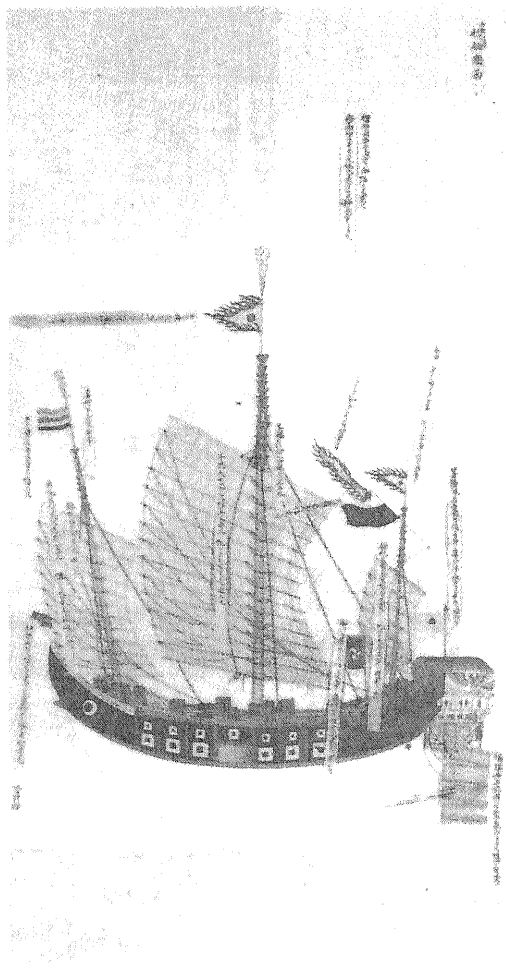


図9 馬艦船図

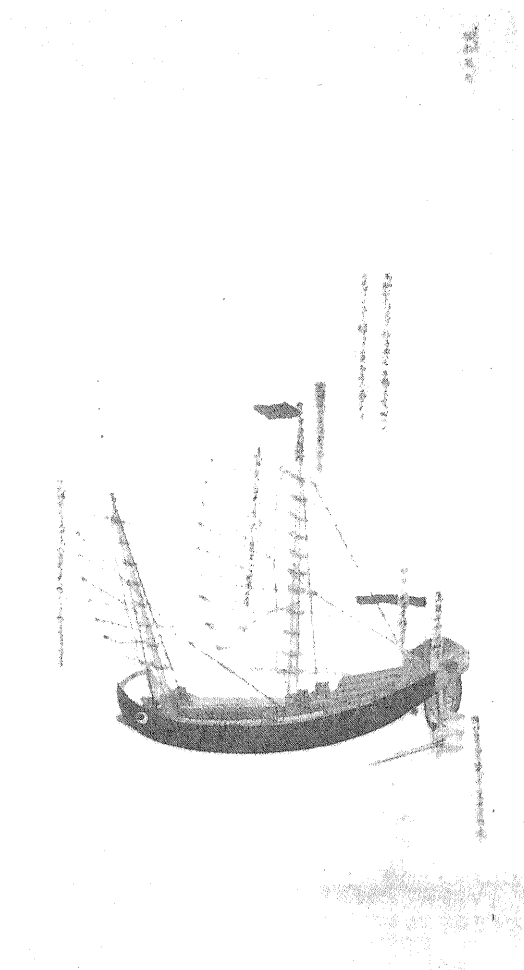


図10 慶良間船図

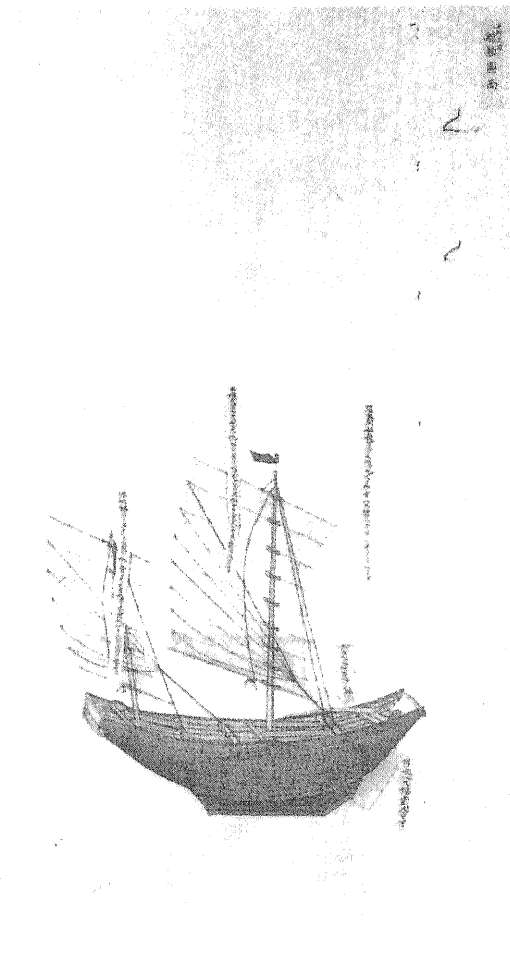


図11 石伝間図

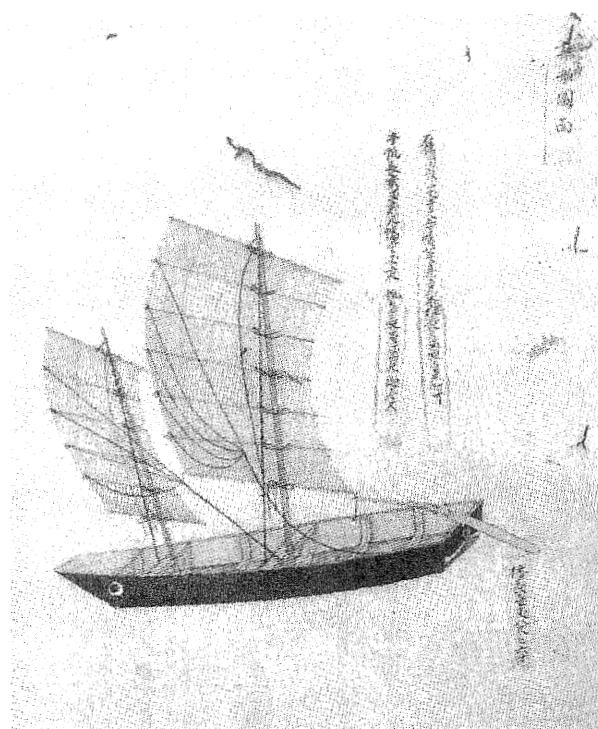


図12 唐船伝間図

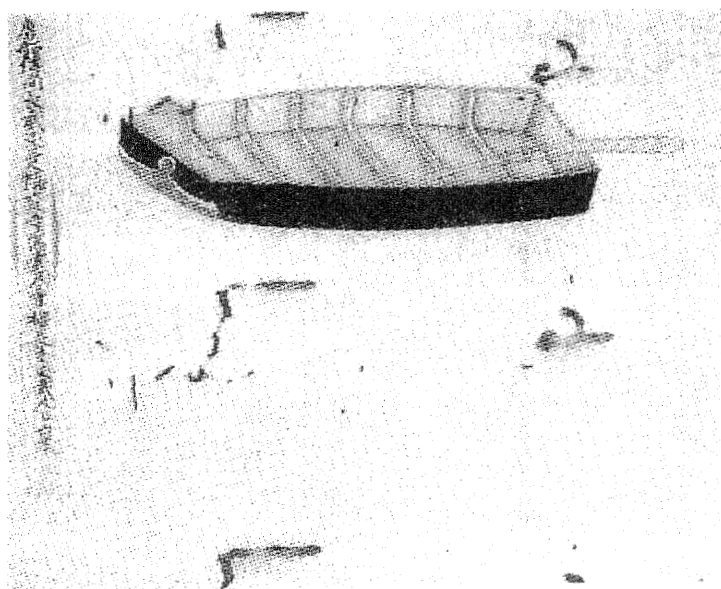


図13 馬艦船伝間図

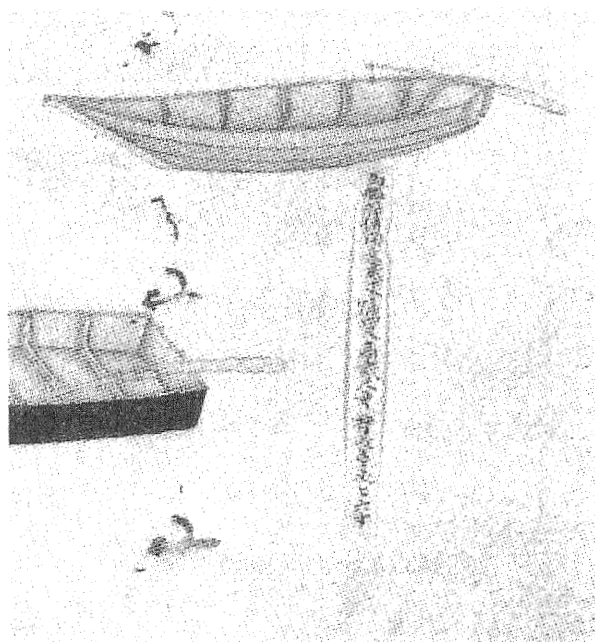


図14 クリ舟図

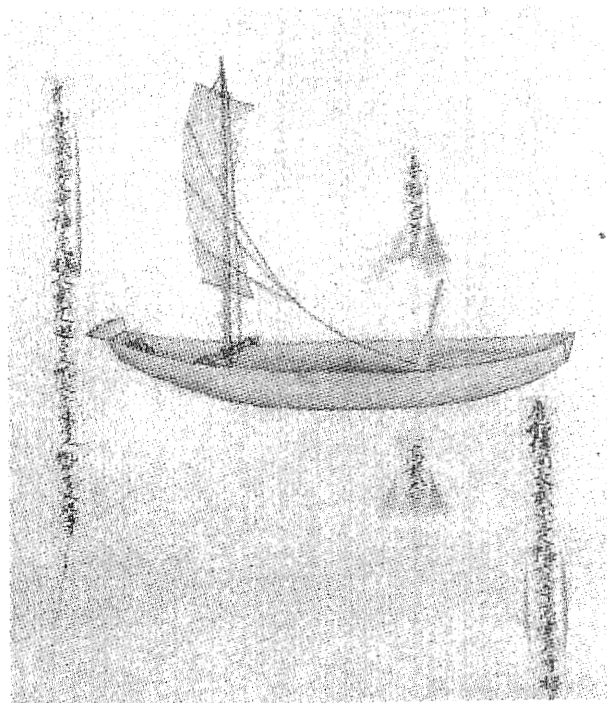


図15 帆装・帆走概念図

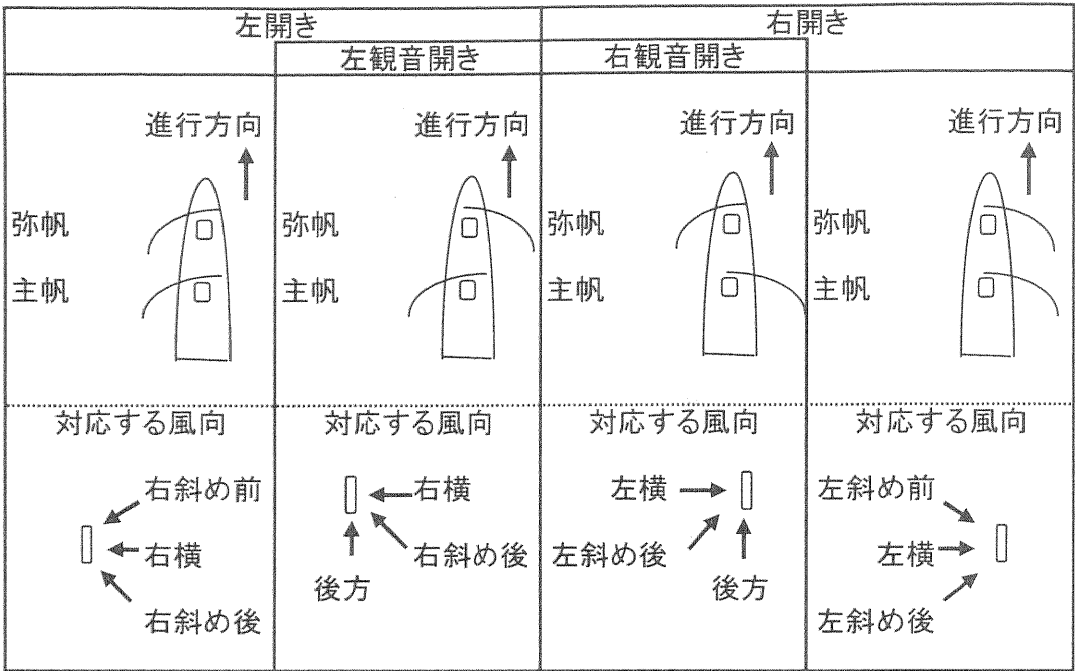


図16 「那覇読史地図」
 (2007年 那覇港湾・空港整備事務所発行『やさしく読める那覇港の歴史』より)



图 17 『中山傳信錄』の「太平山船」

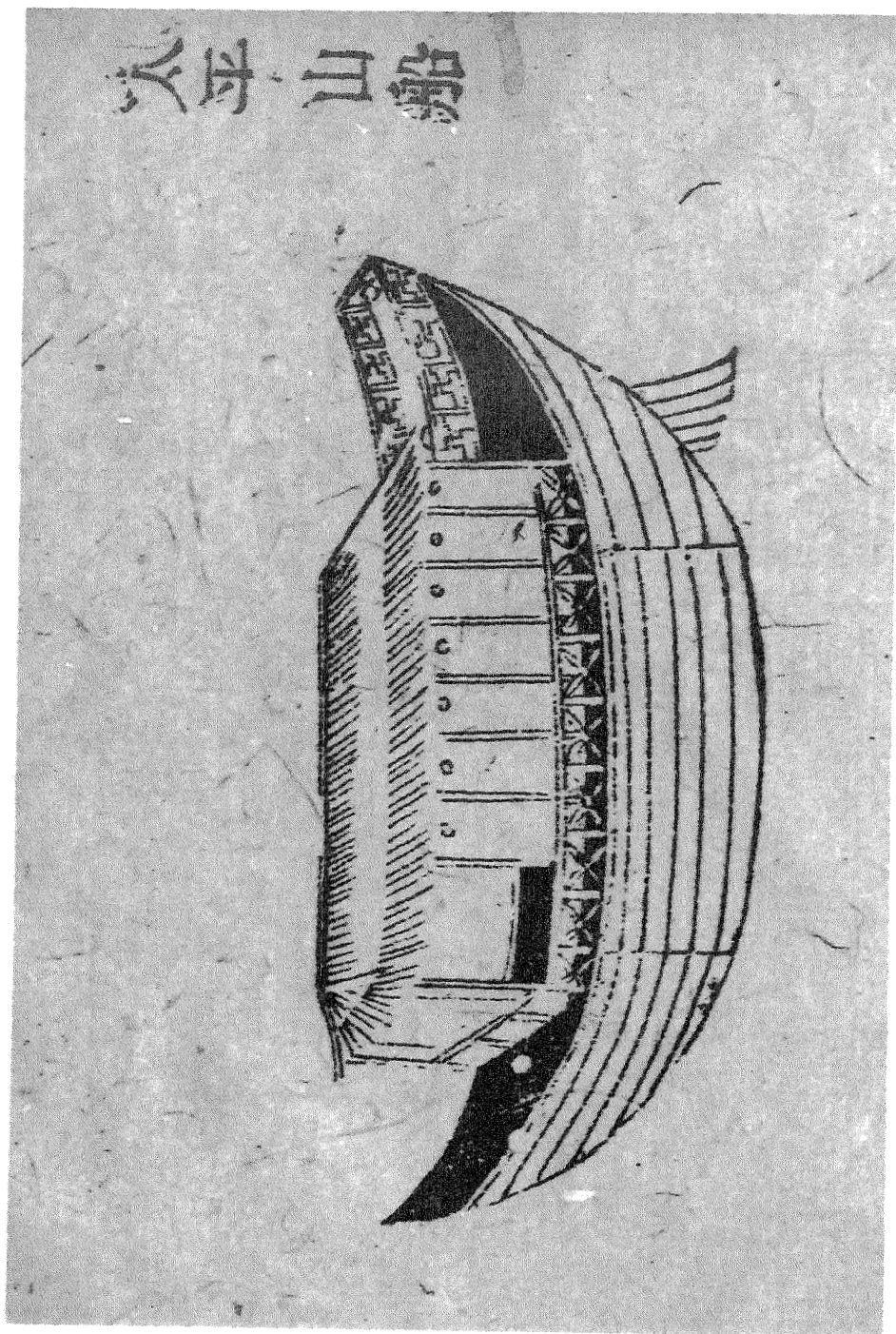
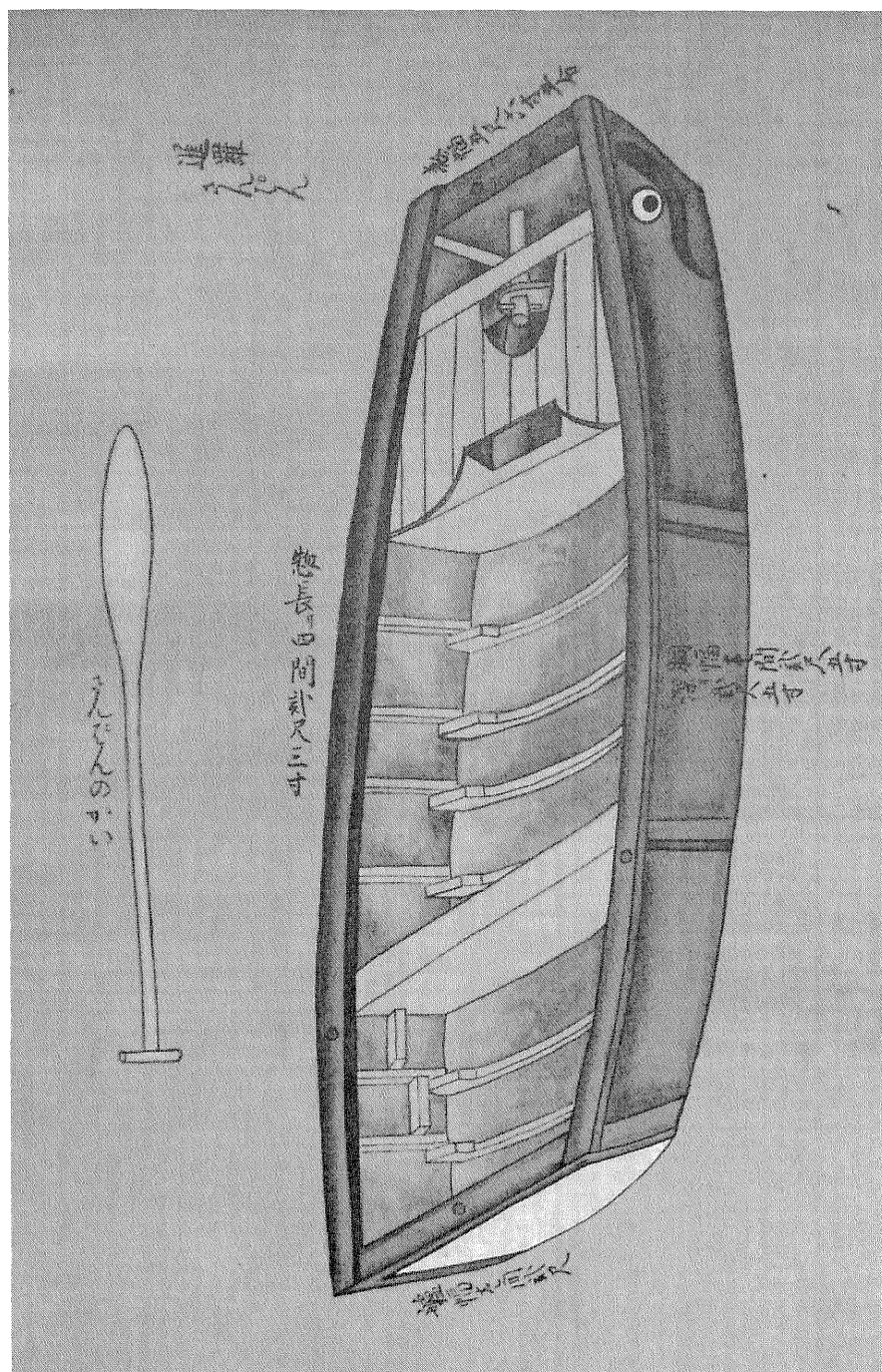


図 18 『外国船具図巻』の「暹羅サンプン」



那覇港図の船一覧表

出典：図11～15・表1～5『うるま ちゅら島 琉球(2006年 九州国立博物館)』
図16・表6『浦添市美術館紀要 第7号(1998年 浦添市美術館)』

表1 沖縄県立博物館所蔵『首里那覇港図屏風』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
第3景	馬艦船	1	帆走中	社蘭沖	2名	右観音開き	
	異国船	1	帆走中	水平線上	2名	不明	白・青・赤の縦三色旗
第4景	馬艦船	2	帆走中	社蘭沖・泊沖各1隻	各1名	右観音開き	出入港各1隻
	馬艦船	3	停泊中	泊	不明	不明	
	クリ船	3	帆走中	泊～慶子瀬	各1名	左開き	
	異国船	1	停泊中	波之上～新重城間			白・青・赤の縦三色旗
第5景	唐船or楷船	1	入港中	慶良間島～崎原(港外)	不明	左観音開き?	黄色地日章三角旗
	慶良間船	3	帆走中	港外2隻・屋良座沖入港中1隻	各2名	右観音開き2隻	
	唐船	1	入港中	波之上～屋良座間	7名	左開き?	五色旗・日章旗・「佛国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・青地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹緗旗(?)・関帝旗
	唐船伝馬or石伝馬	1	不明	唐船の右うしろ	不明	櫓	人員の搬送中か
	馬艦船伝馬(?)	1	不明	唐船の手前	6名 (内5名乗客)	櫓	人員の搬送中か
	クリ船	8	曳航中	唐船の前方	各2名	櫓	唐船の曳航中
第6景	唐船	1	停泊中	屋良座左手前	11名	不明	五色旗・日章旗・黄色地日章三角旗・青地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・青地日章旗
	慶良間船	1	停泊中	スラ所沖	3名	不明	爬龍船競漕見物か?
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	スラ所沖	各7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	スラ所沖	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か?
	舟才船	3	停泊中	沖之寺沖2隻・屋良座沖1隻	9名・不明	不明	うち2隻に白地の薩摩藩幟
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手10名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫓	黒・黄色各1隻
	馬艦船	2	停泊中	新重城沖	不明	不明	七星旗・ムカデ旗(小)・前マスト赤旗・主マスト白吹流し
第7景	慶良間船	1	停泊中	スラ所沖	2名	不明	爬龍船競漕見物か?
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	御物城沖・港内	1名・6名	櫓	1隻は水壳船・他は爬龍船競漕見物か?
	(不明の準構造船)	4	漕行中	スラ所1隻・港内3隻	約5名	櫓	スラ所の1隻は渡船・他の3隻は爬龍船競漕見物か?うち1隻は旗頭あり
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)		爬龍船競漕見物か?
	馬艦船	3	停泊中	御物城沖	不明	不明	前マスト赤旗・主マスト黄色地日章三角旗
	舟才船	2	停泊中	渡地村沖	不明	不明	船体後半部のみ
	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手10名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫓	緑1隻
第8景	クリ船	2	漕行中	港内	3～5名	櫓?	爬龍船競漕見物か?
	唐船伝馬or石伝馬	2	停泊中	落平1隻・仲嶋村1隻	0～1名	櫓	水壳船2隻・うち1隻は取水中
	クリ船	2	漕行中	奥武山～真玉橋間	3名 (内2名乗客)	櫓?	渡船か?
	馬艦船	2	停泊中	碓黄城沖	各2名	不明	赤旗
	慶良間船	2	停泊中	仲嶋村	不明	不明	

表2 滋賀大学経済学部所蔵『琉球貿易図屏風』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
第2扇	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	1	帆走中	泊沖	不明	左観音開き?	観音開きと思われるが、フォアマスト見えず、不審。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	辻沿岸	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
第3扇	馬艦船	1	帆走中	港外	不明	左観音開き?	遠ざかりつつあるか?
	馬艦船?	1	帆走中	入港中	不明	右観音開き	弥帆・主帆ともに上部に補助の布帆あり。あるいは櫓船か?
第3扇	馬艦船	1	帆走中	入港中	不明	不明	帆装は1隻分あるが、船首は2隻見える。不審。
	唐船	1	入港中	波之上〜屋良座間	6名	左開き?	曳航中。五色旗・日章旗・「帰国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・関帝旗・青地日章旗。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	唐船手前	6名	櫓	櫓には2名がとりついている。「唐物方」幟あり(白地に黒文字・薩摩藩紋章入り)。
	クリ船	2	帆走中	三重城手前	各2名	左開き	1隻には帆吊縄あり。
第4扇	唐船	1	帆走中	崎原沖	不明	左観音開き?	大砲発射中。日章旗・黄色地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・関帝旗・青地日章旗。弥帆・主帆に補助の布帆。
	櫓船	1	停泊中	屋良座左手前	6名	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り幟あり。幔幕あり。爬龍船見物か。
	馬艦船	1	帆走中	崎原沖	不明	右開き?	紺地白抜き左三つ巴紋。帆装不審。
	クリ船	1	帆走中	屋良座手前	2名	右開き?	帆吊縄あり。船首から釣竿。
	クリ船	2	漕行中	港内	各3名	櫓と棹?	爬龍船競漕見物か? 1隻は棹で推進?
	クリ船	8	曳航中	屋良座手前	各2名	櫓	唐船の曳航中
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり。屋形あり。那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	3	漕行中	港内	6名 (内4名乗客)	櫓とオール	「唐物方」幟あり(白地に黒文字・薩摩藩紋章入り)・櫓棹併用
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	仲三重城手前	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か?
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	仲三重城手前	4名	不明	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
第5扇	弁才船	2	停泊中	港内	不明	不明	第4扇にまたがる。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・黒字白抜き各1)。
	(不明の準構造船)	1	漕行中	スラ所付近	6名 (内5名乗客)	櫓	渡船。馬艦船伝馬のようにも見える。
	櫓船	1	停泊中	スラ所付近	6名	不明	紺地白抜き左三つ巴紋。爬龍船見物か。
	弁才船	2	停泊中	スラ所付近	不明	不明	爬龍船見物か。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・紺地白抜き各1)。
	弁才船	4	停泊中	沖之寺〜迎恩門間	不明	不明	爬龍船見物か。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・紺地白抜き各2)。
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	スラ所付近	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫓	黒・木・緑各1隻
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	沖之寺〜迎恩門間	5名 (内4名乗客)	櫓	弁才船への渡船か? 女性2名乗船(ジュリか?)
	クリ船	8	漕行中	爬龍船周囲	3名 (漕手1〜2)		爬龍船競漕見物か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	1名・水桶3	櫓	水売船か?
第6扇	クリ船	1	停泊中	落平	1名・水桶3	櫓?	取水
	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 屋根・幔幕あり
	クリ船	3	漕行中	港内	2名	櫓	漁撈中・船首から網
	櫓船	2	停泊中	御物城手前	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	

表3 首里城公園所蔵『那覇港図屏風』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
第1扇	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	硫黄城付近	7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	硫黄城付近	8名	不明	爬龍船見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
	唐船伝馬or石伝馬	1	停泊中	泉崎橋付近	5名 (内4名乗客)	掉?	爬龍船見物か? 渡船?
	馬艦船	1	停泊中	硫黄城付近	8名	不明	爬龍船見物か? 幔幕あり
第2扇	唐船or楷船	1	停泊中	唐船堀	空船	不明	幔装撤去
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か?
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	港内	8~9名 (内7~8名乗客)	櫓	渡船?
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	8名 (内7名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・桜(梅?)の花飾りあり・白地に青の笹紋の幟
	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手26名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り2名	櫓	黒(「とまり」の幟あり)・左向き
第3扇	馬艦船	1	停泊中	港内	4名	不明	紺地に白抜ききの左三つ巴紋幟
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手26名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り2名	櫓	緑・黄色・右向き
	弁才船	2	停泊中	港内	各4名	不明	内1隻は白地に紺の薩摩藩紋幟
第4扇	弁才船	3	停泊中	港内	3~5名	不明	内1隻は紺地に白抜ききの薩摩藩紋幟・他は白地に紺の薩摩藩紋幟
	唐船	1	停泊中	港内	7名	不明	布帆(主マスト)あり・船首から黄色旗2・黄色地日章三角旗・五色幟(ムカデ旗つき)・黄色地日章三角旗・「奉旨佛国」幟(ムカデ旗つき)・関帝王旗・赤字日章三角旗・七星旗(ムカデ旗つき)・赤旗2
	唐船	1	停泊中	港内	8名	不明	帆装なし・船首から黄色旗2・三色旗・五色幟(ムカデ旗つき)・魚型風見(三色旗つき)・「奉旨佛国」幟(ムカデ旗つき)・関帝王旗・赤字日章三角旗・七星旗(ムカデ旗つき)・赤旗2・ウワカガンイタ内側に赤日章あり
第5扇	楷船	1	停泊中	港内	4名	不明	帆装なし・船首から日章旗・不明の吹流し・紺地に白抜ききの左三つ巴紋入り幟・ウワカガンイタ内側に赤日章あり
	楷船(?)	1	停泊中	港内	2名	不明	やや小型(?)・帆装なし・船首から日章三角旗・日章三角旗・白地に紺の左三つ巴紋入り幟・舷側開口部の形状が不審
	楷船(?)	1	停泊中	港内	6名	不明	小型(?)・主マストのみ立つ・白無地四角旗・船尾に日章を描く・白地に紺の左三つ巴紋入り幟・舷側開口部の形状が不審
第6扇	馬艦船	1	帆走中	港内			帆装観音開き・前マストに日章三角・主マストに白四角旗・カガンイタ装飾なし

表4 京都大学総合博物館所蔵『琉球進貢船図屏風』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
第2屏	馬艦船	2	帆走中	入港中	不明	右観音開き?	
	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
第3屏	唐船	1	帆走中	港外	不明	右観音開き	大砲発射中・帆装観音開き。主帆の枚数不審。主帆上部に補助の帆あり。
	唐船	1	曳航中	三重城沖	11名	右開き?	曳航中。五色旗・日章旗・「帰国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・青地日章旗。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	三重城沖	5名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり
	馬艦船伝馬(?)	1	停泊中	辻	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	クリ船	1	漕行中	三重城沖	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 客は傘・扇をかざしている
第4屏	楫船	1	停泊中	屋良座手前	6名	不明	爬龍船見物か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	2	漕行中	港内	5名 (内2名乗客)	櫓・オール	爬龍船見物か? 幔幕あり・櫓で推進・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり
	クリ船	6	曳航中	港内	各2名	櫓	
	クリ船	2	漕行中	港内	各3名	櫓	爬龍船見物か? 客は傘・扇をかざしている
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名	不明	爬龍船見物か? 幔幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
第5屏	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手7名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫓	黒(「とまり」幟あり)
	唐船	1	停泊中	渡地沖	5名	不明	爬龍船見物か。五色旗・日章旗・「接貢」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・青地日章三角旗・青地日章旗。
	弁才船	6	停泊中	港内	各5名	不明	内3隻は紺地に白抜きの薩摩藩紋入り幟・残り2隻は白地に紺の薩摩藩紋入り幟。女性の姿あり。ジュリか。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名	櫓	爬龍船見物か? 客は傘・扇をかざしている。女性の姿あり。ジュリか。
	クリ船	2	漕行中	港内	3~4名	櫓	爬龍船見物か? 内1隻は幔幕あり
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手7名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫓	緑・黄色
第6屏	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	1名・水桶2	櫓	水壳船
	クリ船	1	停泊中	落平	1名・水桶2	棹?	水壳船・取水中
	クリ船(?)	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	棹?	渡船か?
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?

表5 浦添市立美術館所蔵『琉球交易港図屏風』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
第2扇	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	1	帆走中	泊入港中	不明	右観音開き	主帆が弥帆より前に来ている。不審。
第3扇	馬艦船	2	帆走中	泊入港中	不明	右観音開き?	内1隻の主帆がよじれ、マストの下半分が見えている。不審。
	唐船	1	帆走中	港外	不明	左開き	大砲発射中。主帆上部に補助の帆あり。
	唐船	1	曳航中	港内	13名	左開き	左舷船尾に櫓が見える
	慶良間船	1	帆走中	港内	2名	左開き	
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り織あり(船首)
	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫓	爬龍船見物か?
第4扇	指船	1	停泊中	港内	12名	不明	爬龍船見物か? 幔幕あり。
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名	不明	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	2	漕行中	港内	2~4名	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り織あり(船首)
	クリ船	10	曳航中	港内	各2名	櫓	
	クリ船	2	帆走中	港内	各2名	右開き	漁労中か? 釣竿らしきものが船首に見える
	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫓	爬龍船見物か?
第5扇	唐船	1	停泊中	渡地沖	10名	不明	爬龍船見物か。五色旗・日章旗・「接貢」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹緗旗(?)・青地日章三角旗・青地日章旗。
	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち2名・舵取り1名・不明1名	櫓	緑・黒・黄色
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)		爬龍船見物か? 乗客は女性。ジュリか。
	クリ船	3	漕行中	港内	3~5名	櫓	爬龍船見物か? 内1隻は渡地付近(渡船か?)
	弁才船	6	停泊中	港内	不明	不明	爬龍船見物か。白地に紺の薩摩藩紋入り織3隻・紺地に白抜きの薩摩藩紋入り織3隻
第6扇	指船	1	停泊中	港内	8名	不明	爬龍船見物か。幔幕あり。
	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
	馬艦船伝馬(?)	1	停泊中	落平	1名・水桶12	棹?	水売船・取水中
	クリ船	4	操業中	港内	各2名	櫓	船首から網

表6 浦添市立美術館所蔵『琉球交易港図』の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
右幅	馬艦船	1	帆走中	港外	不明	左観音開き	ただし、弥帆は裏返っており、左開きの状態で走っている。
	馬艦船	1	帆走中	入港中	不明	左観音開き	ただし、弥帆は裏返っており、左開きの状態で走っている。
	冊封船	1	帆走中	入港中	不明	右観音開き?	帆の枚数不審。
	冊封船	1	帆走中	入港中	不明	右開き	入港後の回頭が終わり、縮帆中か。風向に対し、帆の向きが不自然。
	唐船	1	停泊中	三重城沖	不明	右開き	旗・幟類に不審。
	馬艦船(?)	1	停泊中	唐船の後方	不明	不明	爬龍船見物か。幔幕あり。船体塗色不審。
	唐船伝馬or石伝馬	1	停泊中	唐船の後方	不明	不明	爬龍船見物か。
	唐船伝馬or石伝馬	3	漕行中	唐船の手前	不明	櫓	爬龍船見物か? 幔幕あり
	クリ船	4	帆走中	港内	2名?	右開き	漁労中か?
	クリ船	2	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫓	爬龍船見物か?
中幅	唐船or楷船	2	停泊中	港内	不明	不明	1隻はやや小型。
	(不明の構造船)	1	停泊中	唐船or楷船の奥	不明	不明	爬龍船見物か?
	馬艦船	3	停泊中	港内	不明	不明	内1隻はやや大型。楷船か?
	馬艦船	1	漕行中	港内	不明	不明	船尾だけ見える。マストの数を見ると他にもう2隻あるはずが見えず。
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か。屋形あり。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	クリ船	4	漕行中	港内	各2名	櫓	漁労中か?
	クリ船	6	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か?
左幅	馬艦船	5	停泊中	渡地沖	不明	不明	爬龍船見物か。
	馬艦船	2	停泊中	唐船小堀	不明	不明	爬龍船見物か。
	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち2名・舵取り1名・不明1名	櫓	緑・黒・黄色
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	港内・落平	1名・水桶2	櫓	水壳船
	唐船伝馬or石伝馬	3	漕行中	港内	7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 乗客に女性も。ジュリか。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 乗客に女性も。ジュリか。
	クリ船	4	漕行中	港内	各2名	櫓	漁労中か?
	クリ船	6	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か?

船型別一覧表

表7 唐船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立 博物館	唐船or楫船	1	入港中	慶良間島～崎原(港外)	不明	左観音開き?	黄色地日章三角旗
	唐船	1	入港中	波之上～屋良座間	7名	左開き?	五色旗・日章旗・「帰国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・青地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・関帝旗
	唐船	1	停泊中	屋良座左手前	11名	不明	五色旗・日章旗・黄色地日章三角旗・青地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・青地日章旗
法賀大学	唐船	1	入港中	波之上～屋良座間	6名	左開き?	曳航中。五色旗・日章旗・「帰国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・関帝旗・青地日章旗。
	唐船	1	帆走中	崎原沖	不明	左観音開き?	大砲発射中。日章旗・黄色地日章三角旗・七星旗・ムカデ旗(小)・関帝旗・青地日章旗。弥帆・主帆に補助の布帆。
首里城	唐船or楫船	1	停泊中	唐船堀	空船	不明	積装撤去
	唐船	1	停泊中	港内	7名	不明	布帆(主マスト)あり・船首から黄色旗2・黄色地日章三角旗・五色幟(ムカデ旗つき)・黄色地日章三角旗・「奉旨帰国」幟(ムカデ旗つき)・関帝王旗・赤字日章三角旗・七星旗(ムカデ旗つき)・赤旗2
	唐船	1	停泊中	港内	8名	不明	帆装なし・船首から黄色旗2・三色旗・五色幟(ムカデ旗つき)・魚型風見(三色旗つき)・「奉旨帰国」幟(ムカデ旗つき)・関帝王旗・赤字日章三角旗・七星旗(ムカデ旗つき)・赤旗2・ウワカガシタ内側に赤日
京都大学	唐船	1	帆走中	港外	不明	右観音開き	大砲発射中・帆装観音開き。主帆の枚数不審。主帆上部に補助の帆あり。
	唐船	1	曳航中	三重城沖	11名	右開き?	曳航中。五色旗・日章旗・「帰国」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・青地日章旗。
	唐船	1	停泊中	渡地沖	5名	不明	爬龍船見物か。五色旗・日章旗・「接貢」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・青地日章三角旗・青地日章旗。
浦添市 (屏風)	唐船	1	帆走中	港外	不明	左開き	大砲発射中。主帆上部に補助の帆あり。
	唐船	1	曳航中	港内	13名	左開き	左舷船尾に櫓が見える
	唐船	1	停泊中	渡地沖	10名	不明	爬龍船見物か。五色旗・日章旗・「接貢」旗・黄色地日章三角旗・ムカデ旗(大)・七星旗・ムカデ旗(小)・黄色地日輪縹縹旗(?)・青地日章三角旗・青地日章旗。
浦添市 (軸装)	冊封船	1	帆走中	入港中	不明	右観音開き?	帆の枚数不審。
	冊封船	1	帆走中	入港中	不明	右開き	入港後の回頭が終わり、縮帆中か。風向に対し、帆の向きが不自然。
	唐船	1	停泊中	三重城沖	不明	右開き	旗・幟類に不審。
	唐船or楫船	2	停泊中	港内	不明	不明	1隻はやや小型。

表8 楫船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立博物館	唐船or楫船	1	入港中	慶良間島～崎原(港外)	不明	左観音開き?	黄色地日章三角旗
滋賀大学	楫船	1	停泊中	屋良座左手前	6名	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り幟あり。幔幕あり。爬龍船見物か。
	楫船	1	停泊中	スラ所付近	6名	不明	紺地白抜き左三つ巴紋。爬龍船見物か。
	楫船	2	停泊中	御物城手前	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
首里城	唐船or楫船	1	停泊中	唐船堀	空船	不明	繕装撤去
	楫船	1	停泊中	港内	4名	不明	帆装なし・船首から日章旗・不明の吹流し・紺地に白抜きの左三つ巴紋入り幟・ウワカガンイタ内側に赤日章あり
	楫船(?)	1	停泊中	港内	2名	不明	やや小型(?)・帆装なし・船首から日章三角旗・日章三角旗・白地に紺の左三つ巴紋入り幟・舷側開口部の形状が不審
	楫船(?)	1	停泊中	港内	6名	不明	小型(?)・主マストのみ立つ・白無地四角旗・船尾に日章を描く・白地に紺の左三つ巴紋入り幟・舷側開口部の形状が不審
京都大学	楫船	1	停泊中	屋良座手前	6名	不明	爬龍船見物か?
浦添市 (屏風)	楫船	1	停泊中	港内	12名	不明	爬龍船見物か? 幔幕あり。
	楫船	1	停泊中	港内	8名	不明	爬龍船見物か。幔幕あり。
浦添市 (軸装)	唐船or楫船	2	停泊中	港内	不明	不明	1隻はやや小型。

表9 馬艦船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立博物館	馬艦船	1	帆走中	社蘭沖	2名	右観音開き	
	馬艦船	2	帆走中	社蘭沖・泊沖各1隻	各1名	右観音開き	出入港各1隻
	馬艦船	3	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	2	停泊中	新重城沖	不明	不明	七星旗・ムカデ旗(小)・前マスト赤旗・主マスト白吹流し
	馬艦船	3	停泊中	御物城沖	不明	不明	前マスト赤旗・主マスト黄色日章三角旗
	馬艦船	2	停泊中	硫黄城沖	各2名	不明	赤旗
滋賀大学	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	1	帆走中	泊沖	不明	左観音開き?	観音開きと思われるが、フォアマスト見えず、不審。
	馬艦船	1	帆走中	港外	不明	左観音開き?	遠ざかりつつあるか?
	馬艦船?	1	帆走中	入港中	不明	右観音開き	弥帆・主帆ともに上部に補助の布帆あり。あるいは楫船か?
	馬艦船	1	帆走中	入港中	不明	不明	帆装は1隻分があるが、船首は2隻見える。不審。
	馬艦船	1	帆走中	崎原沖	不明	右開き?	紺地白抜き左三つ巴紋。帆装不審。
首里城	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	
	馬艦船	1	停泊中	硫黄城付近	8名	不明	爬龍船見物か? 幔幕あり
	馬艦船	1	停泊中	港内	4名	不明	紺地に白抜きの左三つ巴紋幟
	馬艦船	1	帆走中	港内			帆装観音開き・前マストに日章三角・主マストに白四角旗・カガンイタ装飾なし
京都大学	馬艦船	2	帆走中	入港中	不明	右観音開き?	
	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
浦添市 (屏風)	馬艦船	4	停泊中	泊	不明	不明	
	馬艦船	1	帆走中	泊入港中	不明	右観音開き?	主帆が弥帆より前に来ている。不審。
	馬艦船	2	帆走中	泊入港中	不明	右観音開き?	内1隻の主帆がよじれ、マストの下半分が見えている。不審。
浦添市 (軸装)	馬艦船	2	停泊中	港内	不明	不明	紺地白抜き左三つ巴紋入り
	馬艦船	1	帆走中	港外	不明	左観音開き	ただし、弥帆は裏返っており、左開きの状態で走っている。
	馬艦船	1	帆走中	入港中	不明	左観音開き	ただし、弥帆は裏返っており、左開きの状態で走っている。
	馬艦船(?)	1	停泊中	唐船の後方	不明	不明	爬龍船見物か。幔幕あり。船体塗色不審。
	馬艦船	3	停泊中	港内	不明	不明	内1隻はやや大型。楫船か?
	馬艦船	1	漕行中	港内	不明	不明	船尾だけ見える。マストの数を見ると他にもう2隻あるはずが見えず。
	馬艦船	5	停泊中	瀬地沖	不明	不明	爬龍船見物か。
	馬艦船	2	停泊中	唐船小堀	不明	不明	爬龍船見物か。

表10 慶良間船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立 博物館	慶良間船	3	帆走中	港外2隻・屋良座沖入港中1隻	各2名	右観音開き2隻 左観音開き1隻	
	慶良間船	1	停泊中	スラ所沖	3名	不明	爬龍船競漕見物か？
	慶良間船	1	停泊中	スラ所沖	2名	不明	爬龍船競漕見物か？
	慶良間船	2	停泊中	仲嶋村	不明	不明	
浦添市 (屏風)	慶良間船	1	帆走中	港内	2名	左開き	

表11 唐船伝馬・石伝馬

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立 博物館	唐船伝馬or石伝馬	1	不明	唐船の右うしろ	不明	櫓	人員の搬送中か？
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	スラ所沖	各7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か？
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	御物城沖・港内	1名・6名	櫓	1隻は水売船・他は爬龍船競漕見物か？
	唐船伝馬or石伝馬	2	停泊中	落平1隻・仲嶋村1隻	0～1名	櫓	水売船2隻・うち1隻は取水中
滋賀大学	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	仲三重城手前	4名	不明	爬龍船競漕見物か？旗頭あり・那覇四町関係者か？
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	スラ所付近	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か？旗頭あり・那覇四町関係者か？
首里城	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	硫黄城付近	8名	不明	爬龍船見物か？旗頭あり・那覇四町関係者か？
	唐船伝馬or石伝馬	1	停泊中	泉崎橋付近	5名 (内4名乗客)	棹？	爬龍船見物か？渡船？
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か？
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	港内	8～9名 (内7～8名乗客)	櫓	渡船？
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	8名 (内7名乗客)	櫓	爬龍船見物か？幔幕あり・桜(梅？)の花飾りあり・白地に青の笹紋の幟
京都大学	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名	不明	爬龍船見物か？幔幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か？
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船見物か？屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か？
浦添市 (屏風)	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か？屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か？
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船見物か？屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か？
浦添市 (軸装)	唐船伝馬or石伝馬	1	停泊中	唐船の後方	不明	不明	爬龍船見物か？
	唐船伝馬or石伝馬	3	漕行中	唐船の手前	不明	櫓	爬龍船見物か？幔幕あり
	唐船伝馬or石伝馬	1	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か？屋形あり。
	唐船伝馬or石伝馬	2	漕行中	港内・落平	1名・水桶2	櫓	水売船
	唐船伝馬or石伝馬	3	漕行中	港内	7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船見物か？乗客に女性も。ジュリカ。

表12 馬艦船伝馬

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (載貨状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立博物館	馬艦船伝馬(?)	1	不明	唐船の手前	6名 (内5名乗客)	櫓	人員の搬送中か
沖縄県立博物館	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	スラ所沖	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)		爬龍船競漕見物か?
滋賀大学	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	辻沿岸	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	唐船手前	6名	櫓	櫓には2名がとりついている。「唐物方」幟あり(白地に黒文字・薩摩藩紋章入り)。
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か? 旗頭あり。屋形あり。那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	3	漕行中	港内	6名 (内4名乗客)	櫓とオール	「唐物方」幟あり(白地に黒文字・薩摩藩紋章入り)・櫓権併用
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	仲三重城手前	5名 (内4名乗客)	櫓	爬龍船競漕見物か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	沖之寺～迎恩門間	5名 (内4名乗客)	櫓	弁才船への渡船か? 女性2名乗船(ジュリか?)
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	1名・水桶3	櫓	水売船か?
首里城	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	硫黄城付近	7名 (内6名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 旗頭あり・那覇四町関係者か?
京都大学	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	三重城沖	5名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幟幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり
	馬艦船伝馬(?)	1	停泊中	辻	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幟幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幟幕あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	2	漕行中	港内	5名 (内2名乗客)	櫓・オール	爬龍船見物か? 幟幕あり・櫓権で推進・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名	櫓	爬龍船見物か? 客は傘・扇をかざしている。女性の姿あり。ジュリか。
浦添市 (屏風)	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	1名・水桶2	櫓	水売船
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 幟幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり(船首)
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	4名	不明	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	2	漕行中	港内	2～4名	櫓	爬龍船見物か? 幟幕あり・白地に紺の薩摩藩紋入り幟あり(船首)
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)		爬龍船見物か? 乗客は女性。ジュリか。
浦添市 (軸装)	馬艦船伝馬(?)	1	停泊中	落平	1名・水桶12	棹?	水売船・取水中
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	不明	櫓	爬龍船見物か? 屋根あり・旗頭あり・那覇四町関係者か?
	馬艦船伝馬(?)	1	漕行中	港内	6名 (内5名乗客)	櫓	爬龍船見物か? 乗客に女性も。ジュリか。

表13 クリ船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (観賞状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立 博物館	クリ船	3	帆走中	泊～慶干瀬	各1名	左開き	
	クリ船	8	曳航中	唐船の前方	各2名	櫂	唐船の曳航中
	クリ船	2	漕行中	港内	3～5名	櫂？	爬龍船競漕見物か？
	クリ船	2	漕行中	奥武山～真玉橋間	3名 (内2名乗客)	櫂？	渡船か？
滋賀大学	クリ船	2	帆走中	三重城手前	各2名	左開き	1隻には帆吊縄あり。
	クリ船	1	帆走中	屋良座手前	2名	右開き？	帆吊縄あり。船首から釣竿。
	クリ船	2	漕行中	港内	各3名	櫂と棹？	爬龍船競漕見物か？1隻は棹で推進？
	クリ船	8	曳航中	屋良座手前	各2名	櫂	唐船の曳航中
	クリ船	8	漕行中	爬龍船周囲	3名 (漕手1～2名)		爬龍船競漕見物か？
	クリ船	1	停泊中	落平	1名・水桶3	棹？	取水中
	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫂	爬龍船競漕見物か？屋根・幔幕あり
京都大学	クリ船	3	漕行中	港内	2名	櫂	漁撈中・船首から網
	クリ船	1	漕行中	三重城沖	4名 (内3名乗客)	櫂	爬龍船見物か？客は傘・扇をかざしている
	クリ船	6	曳航中	港内	各2名	櫂	
	クリ船	2	漕行中	港内	各3名	櫂	爬龍船見物か？客は傘・扇をかざしている
	クリ船	2	漕行中	港内	3～4名	櫂	爬龍船見物か？内1隻は幔幕あり
	クリ船	1	停泊中	落平	1名・水桶2	棹？	水売船・取水中
	クリ船(?)	1	漕行中	港内	4名 (内3名乗客)	棹？	渡船か？
浦添市 (屏風)	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫂	爬龍船見物か？
	クリ船	10	曳航中	港内	各2名	櫂	
	クリ船	2	帆走中	港内	各2名	右開き	漁労中か？釣竿らしきものが船首に見える
	クリ船	1	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫂	爬龍船見物か？
	クリ船	3	漕行中	港内	3～5名	櫂	爬龍船見物か？内1隻は渡地付近(渡船か？)
	クリ船	4	操業中	港内	各2名	櫂	船首から網
浦添市 (軸装)	クリ船	4	帆走中	港内	2名？	右開き	漁労中か？
	クリ船	2	漕行中	港内	3名 (内2名乗客)	櫂	爬龍船見物か？
	クリ船	4	漕行中	港内	各2名	櫂	漁労中か？
	クリ船	6	漕行中	港内	不明	櫂	爬龍船見物か？
	クリ船	4	漕行中	港内	各2名	櫂	漁労中か？
	クリ船	6	漕行中	港内	不明	櫂	爬龍船見物か？
	クリ船	6	漕行中	港内	不明	櫂	爬龍船見物か？

表14 船型不明の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (観賞状況)	帆装 ・推進具	その他
沖縄県立 博物館	(不明の準構造船)	4	漕行中	スラ所1隻・港内3隻	約5名	櫂	スラ所の1隻は渡船・他の3隻は爬龍船競漕見物か？うち1隻は旗頭あり
滋賀大学	(不明の準構造船)	1	漕行中	スラ所付近	6名 (内5名乗客)	櫂	渡船。馬艦船伝馬のようにも見える。
浦添市 (軸装)	(不明の構造船)	1	停泊中	唐船or櫓船の奥	不明	不明	爬龍船見物か？

表15 その他の船

	船種	数	状態	所在	搭乗人員数 (観覧状況)	帆装・推進具	その他
沖縄県立博物館	異国船	1	帆走中	水平線上	2名	不明	白・青・赤の縦三色旗
	異国船	1	停泊中	波之上～新重城間			白・青・赤の縦三色旗
	弁才船	3	停泊中	沖之寺沖2隻・屋良座沖1隻	9名・不明	不明	うち2隻に白地の薩摩藩幟
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手10名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫂	黒・黄色各1隻
	弁才船	2	停泊中	渡地村沖	不明	不明	船体後半部のみ
	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手10名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫂	緑1隻
滋賀大学	弁才船	2	停泊中	港内	不明	不明	第4層にまたがる。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・黒字白抜き各1)。
	弁才船	2	停泊中	スラ所付近	不明	不明	爬龍船見物か。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・紺地白抜き各1)。
	弁才船	4	停泊中	沖之寺～迎恩門間	不明	不明	爬龍船見物か。薩摩藩紋章入り幟あり(白地黒文字・紺地白抜き各2)。
	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明	櫂	黒・木・緑各1隻
首里城	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手26名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り2名	櫂	黒(「とまり」の幟あり)・左向き
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手26名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り2名	櫂	緑・黄色・右向き
	弁才船	2	停泊中	港内	各4名	不明	内1隻は白地に紺の薩摩藩紋幟
	弁才船	3	停泊中	港内	3～5名	不明	内1隻は紺地に白抜きの薩摩藩紋幟・他は白地に紺の薩摩藩紋幟
京都大学	爬龍船	1	競漕中	港内	漕手7名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明	櫂	黒(「とまり」幟あり)
	弁才船	6	停泊中	港内	各5名	不明	内3隻は紺地に白抜きの薩摩藩紋入り幟・残り2隻は白地に紺の薩摩藩紋入り幟。女性の姿あり。ジュリか。
	爬龍船	2	競漕中	港内	漕手7名・旗振り3名・鉦打ち1名・舵取り1名・不明1名	櫂	緑・黄色
浦添市(屏風)	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち2名・舵取り1名・不明	櫂	緑・黒・黄色
	弁才船	6	停泊中	港内	不明	不明	爬龍船見物か。白地に紺の薩摩藩紋入り幟3隻・紺地に白抜きの薩摩藩紋入り幟3
浦添市(軸装)	爬龍船	3	競漕中	港内	漕手6名・旗振り3名・鉦打ち2名・舵取り1名・不明	櫂	緑・黒・黄色

* L=全長 B=最大幅(中胴幅) D=最大深さ(後深さ)

	船体					本帆柱		弛帆柱		本帆		弛帆		本帆 柱 長/L*	L/B*D/B*		
	L* mm	舳高 mm	艫高 mm	B* mm	D* mm	長 mm	廻 mm	長 mm	廻 mm	長 mm	桁 mm	長 mm	桁 mm				
琉球船図	「楷船の図」付箋	34845	7575	8181	9696	5454	30300	4545	16665	2424	22119	15453	14544	7272	0.87	3.59	0.56
	「馬艦船の図」付箋	14241	4303	4545	5454	3333	13635	1818	9393	1515	11514	8181	6666	4545	0.96	2.61	0.61
	「慶良間船の図」付箋	13029	3333	3939		2424	13029	909	9696	606	9696	6363	5606	6363	1		
	「唐船の図」付箋	34845	7575	8181	9696	5454	30300	4545	16665	2424	22119	15453	14544	7272	0.87	3.59	0.56
	「石伝馬」付箋	9545			2121	756	9090	5151			6666	4545			0.95	4.5	0.36
	「馬艦船伝馬」付箋	6060			1212	756										5	0.62
	「唐船伝馬」付箋	6969			1970	697										3.54	0.35
	「ク」船付箋	7878			909	818	6060	303			3333	909			0.77	8.67	0.9
その他の	東博目録「真進船模型」	1550	440	565	425		1300				690	505			0.84	3.65	
	東博目録「馬艦船模型」	840	240	225	240		765				470	330			0.91	3.5	
	『中山傳信録』第1船	32000			8960	4800	29440		23040		16900	16640	8960	7040		3.57	0.54
	同第2船	37760			8000	3840	27200		20080		18240	17920	18240	17920		4.72	0.48
	嘉靖期冊封使船	46650			8080	4040	22390									5.77	0.5
萬曆期冊封使船	46650			9830	4140	22390									4.75	0.42	

注1 『中山傳信録』第1船・第2船、嘉靖期・萬曆期冊封使船の諸元については、Wang Guanzao (A STUDY OF DRAWINGS OF ANCIENT CHINESE SHIPS PRESERVED IN JAPAN, *Proceedings*, MAHIR, 1991, Shanghai) ならびに Chen Qi・Chen Yingdong (CHINESE FU-CHUAN, *Proceedings*, MAHIR, 1991, Shanghai)、趙建群・陳鑑(「明代使琉球」冊封舟)考述、『船史研究』4・5、中国造船工程学会、

注2 東博目録については、『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇(中央公論美術出版、2003年)』によった。

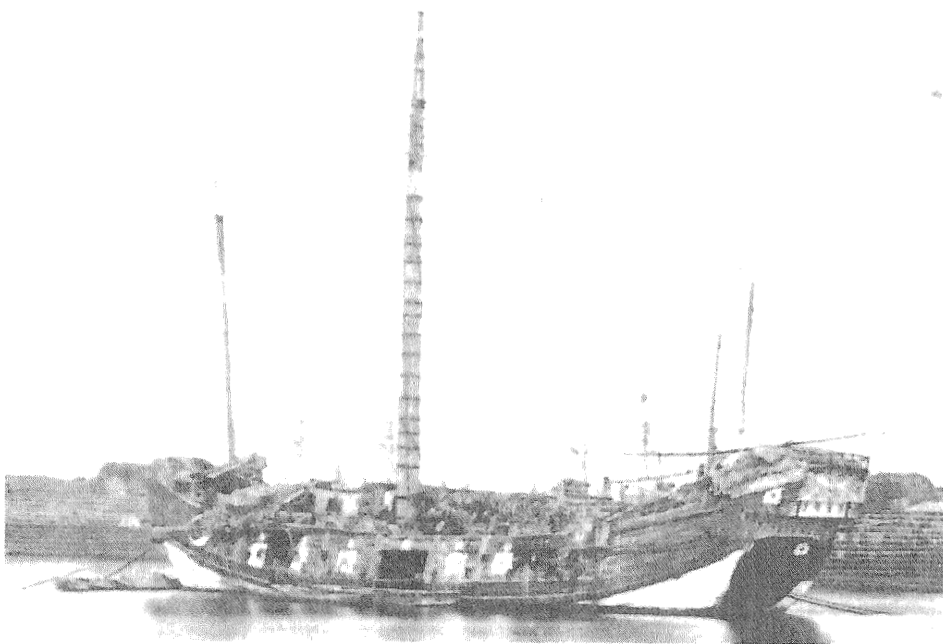


写真1 鹿児島港の楷船（東京国立博物館蔵「西国巡幸写真」より）



写真2 国場川の馬艦船（沖縄県立図書館蔵『宝玲叢刊 写真集 望郷・沖縄』より）

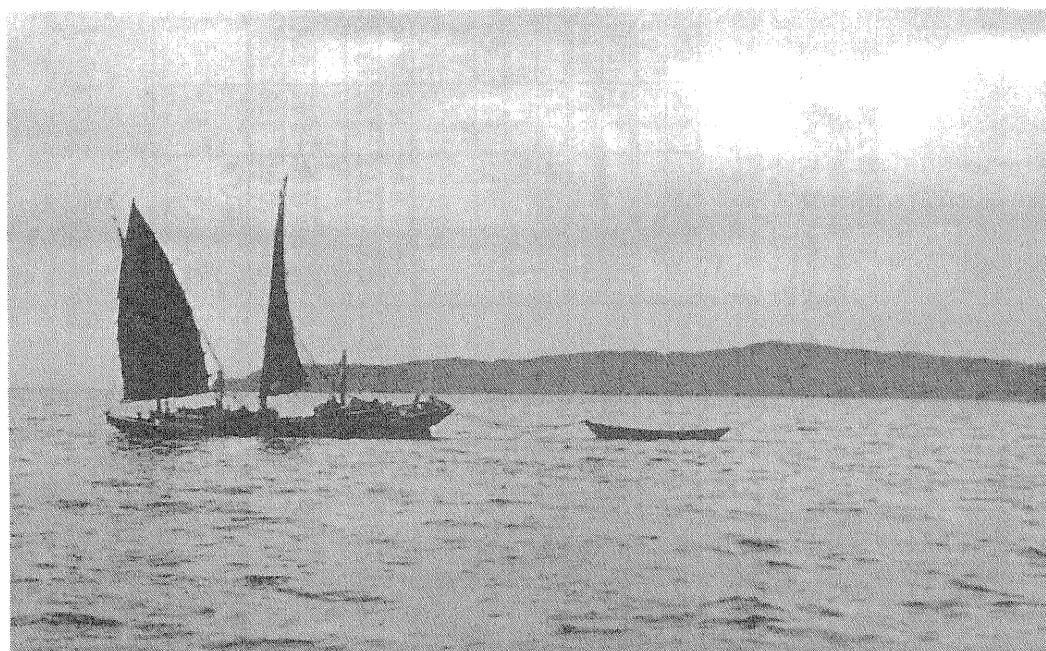


写真3 平安座～屋敷名間海上の馬艦船（1953年、F・R・ピッツ撮影、平安座自治会）

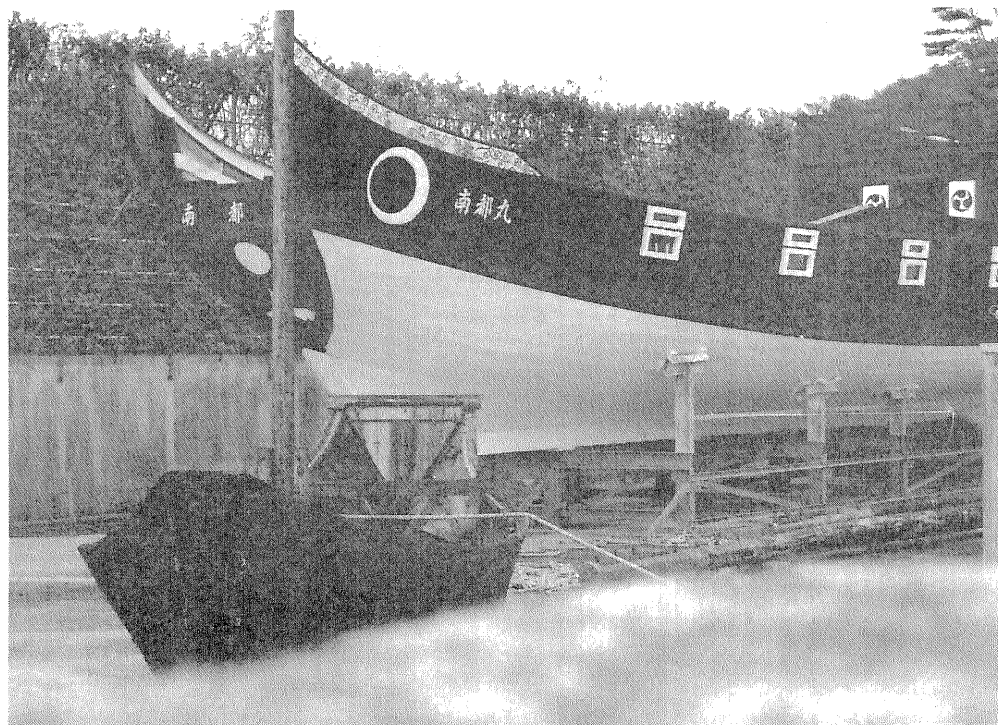


写真4 唐船模型（沖縄県八重瀬町にて）



写真5 黒島の爬龍船

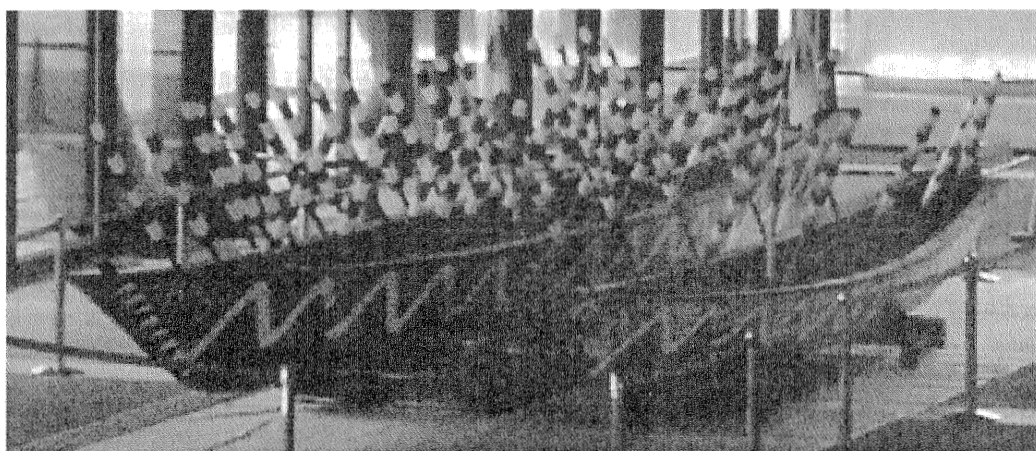


写真6 塩屋湾のウンジャミの船（国立九州博物館蔵）

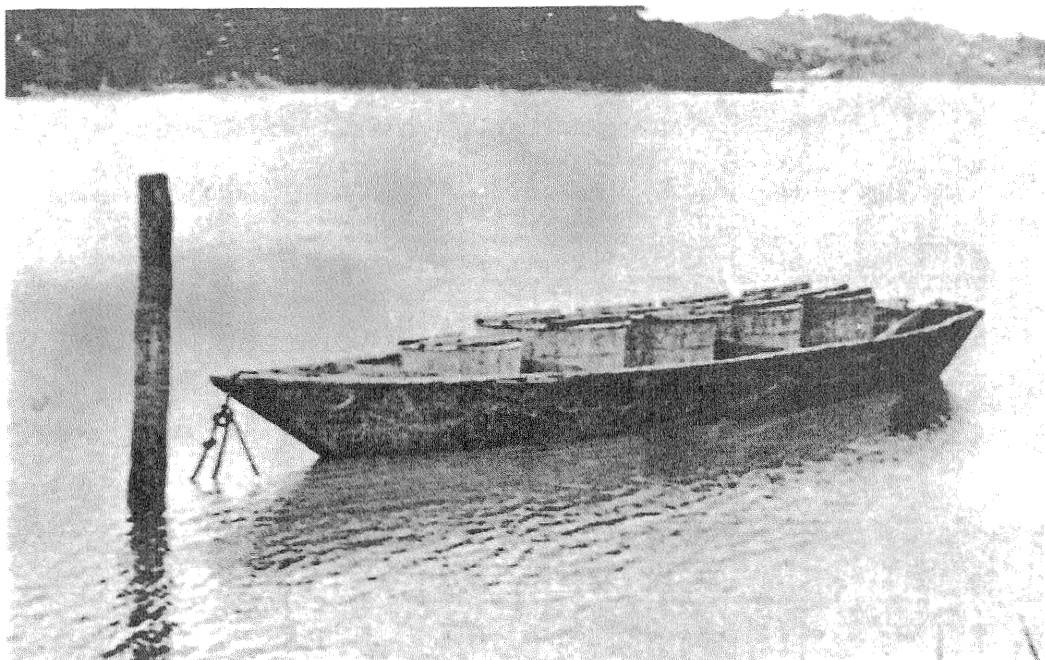


写真7 落平の水売船



写真8 台湾・台北郊外のサンパン